

# ポストコロナに向けた 国際会議誘致競争力向上のための事例集



令和5年度

開催地域の魅力を参加者に  
提供する取組事例の紹介



観光庁  
Japan Tourism Agency



ユニークベニュー (UV)



エクスカーション (EX)



地域参加プログラム (地域)



## CONTENTS

- 02 イン트로ダクション
- 04 国際会議誘致競争力向上に向けた事業分析
- 08 採択された各国際会議の〈参加者へのアンケート結果〉
- 15 令和5年度採択事業一覧マップ
- 16 事業紹介
- 56 令和5年度 採択事業一覧

コロナ禍においては、世界中で人の移動や集会が制限され、これまで参加者が一堂に会することを前提としていた国際会議の多くは中止・延期を余儀なくされたが、コロナが収束した今もなお、開催件数はコロナ前(2019)水準までの回復には至っていない。また、実地参加とオンライン参加を組み合わせたハイブリッド開催形態の浸透が、国際会議開催による経済効果の回復・拡大への障壁となっている側面もある。

今後これらの重要課題に対応していくためには、我が国における国際会議自体の質を高めるのみならず、ネットワーキング機会の充実や開催地の魅力向上を図ることにより国内各都市における国際会議の誘致力を向上させていくことが求められる。また、各会議への

実地参加者数を増加させていくことや開催時の直接的な経済効果を高めることに限らず、中長期的なレガシー創出を図ることで、国際会議の開催効果を拡大させていくことも重要である。

以上の背景から、本事業では下記①②③を目的として、国際会議におけるユニークベニューの活用・エクスカージョン/テクニカルビジット・地域参加プログラム等の実施を対象とする実証事業を行った。

- ①訪日外国人の実地参加者数と一人当たりの消費額の増加による経済効果の拡大
- ②自治体の枠を超えた広域連携による、開催地のさらなる魅力の創出

- ③開催地ステークホルダーとの連携・参画促進によるレガシーの創出

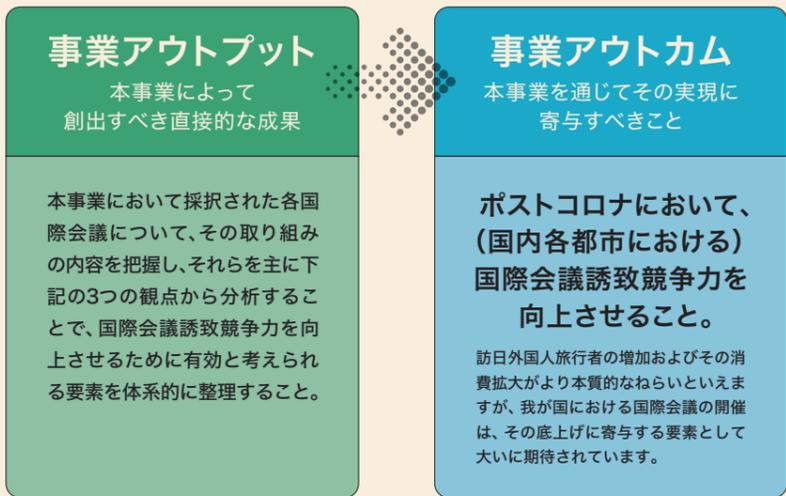
今回の実証事業を通じて、一般的な国際会議以上の開催効果を見いだすとともに、国際会議主催者と地域のコンベンションビューロー等の連携により、今まで活用されていなかったコンテンツの掘り起こし・活用例の蓄積につなげることができた。

本事例集は、実証事業の内容とその成果を各地のコンベンションビューローをはじめとする地域のMICE関係者に展開し、全国において同様の取り組みを促進するためのツールとして活用いただくことを目的として制作したものである。

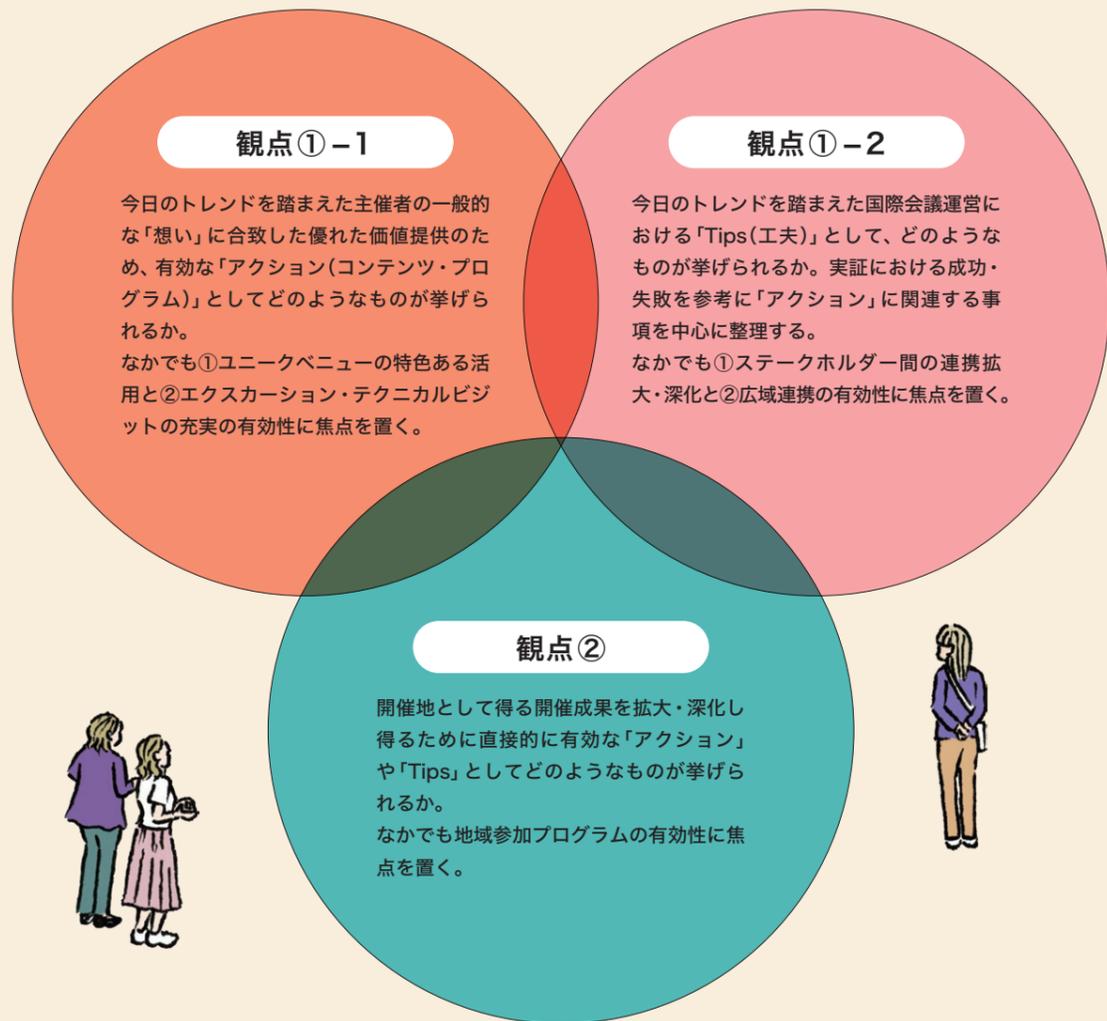
# 〈国際会議誘致競争力向上に向けた事業分析〉

「ポストコロナに向けた国際会議誘致競争力向上事業」は、採択された各国際会議におけるさまざまな取り組みを単に支援するのみならず、誘致競争力強化の道筋を探る調査事業としての側面も有しています。

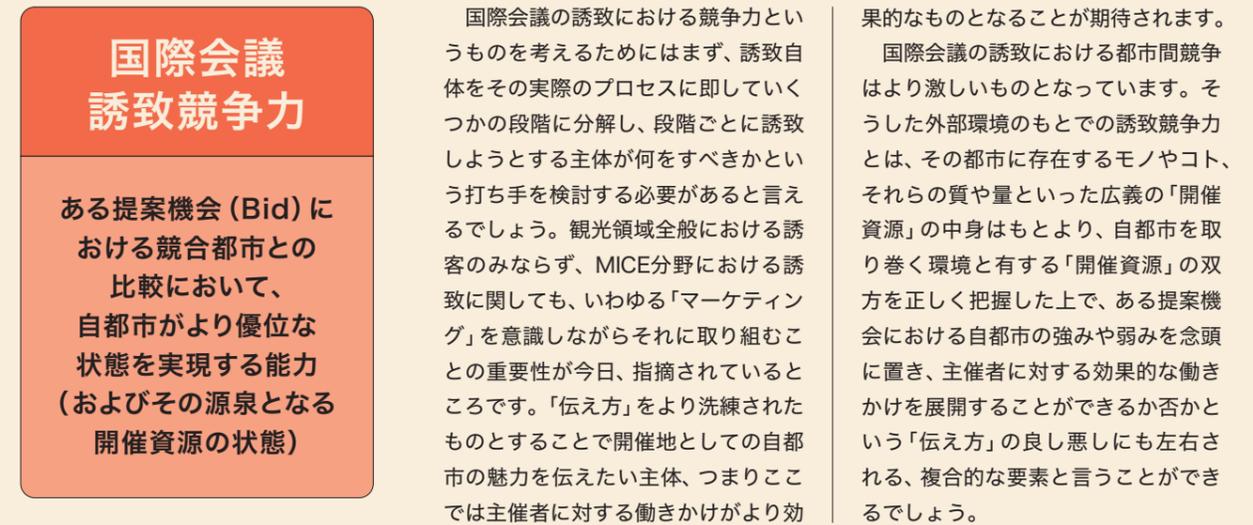
それゆえに本事業において採択された各国際会議における取り組みの中身を具体的に調査し、国際会議の開催地として、我が国がより魅力的な存在となるために有効と考えられる方向性について整理を試みました。



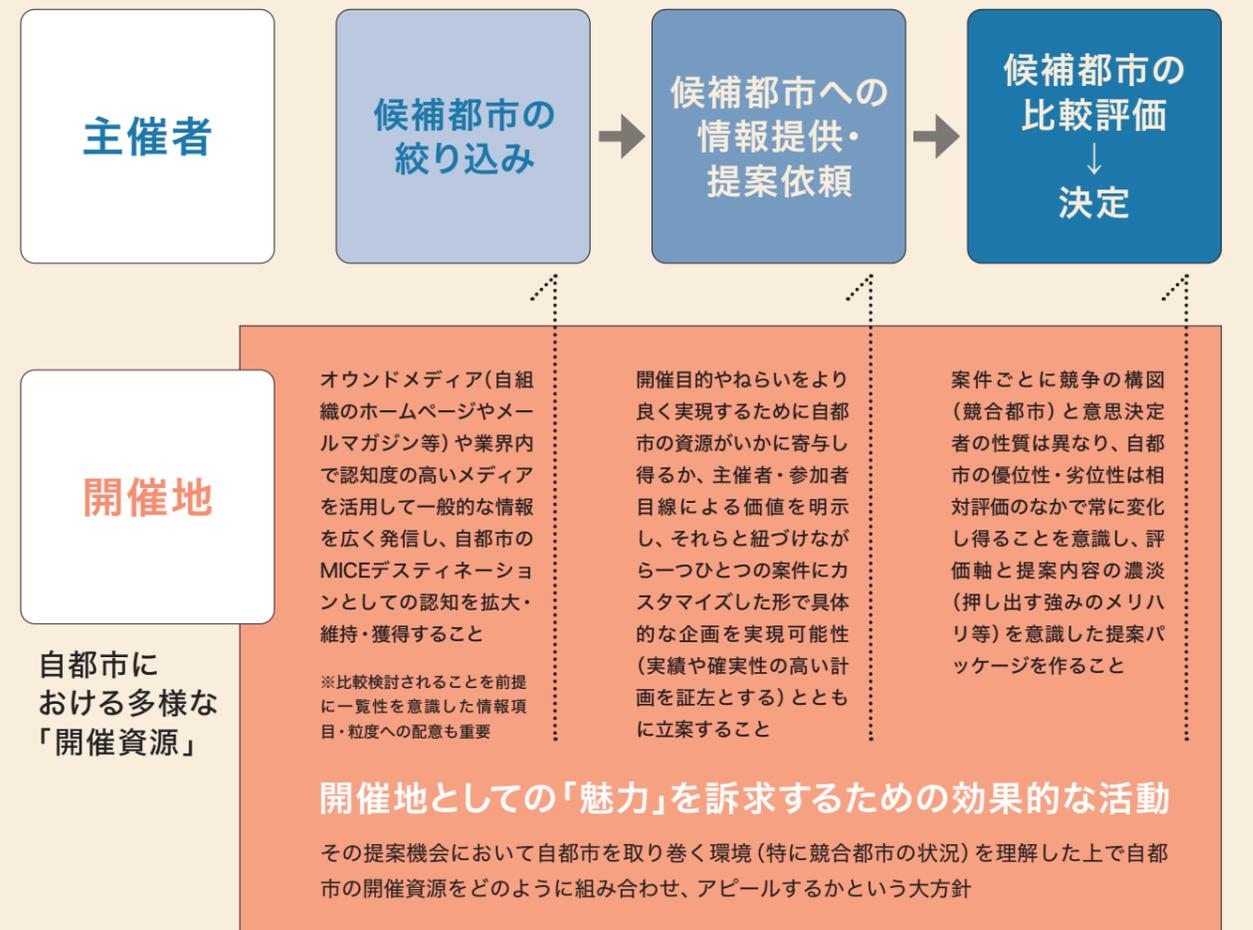
## 採択された各国際会議における取り組みを考察するにあたっての主たる観点



「ポストコロナに向けた国際会議誘致競争力」とは、そもそもどういったものでしょうか。本事業では、シンプルに以下のように定義します。

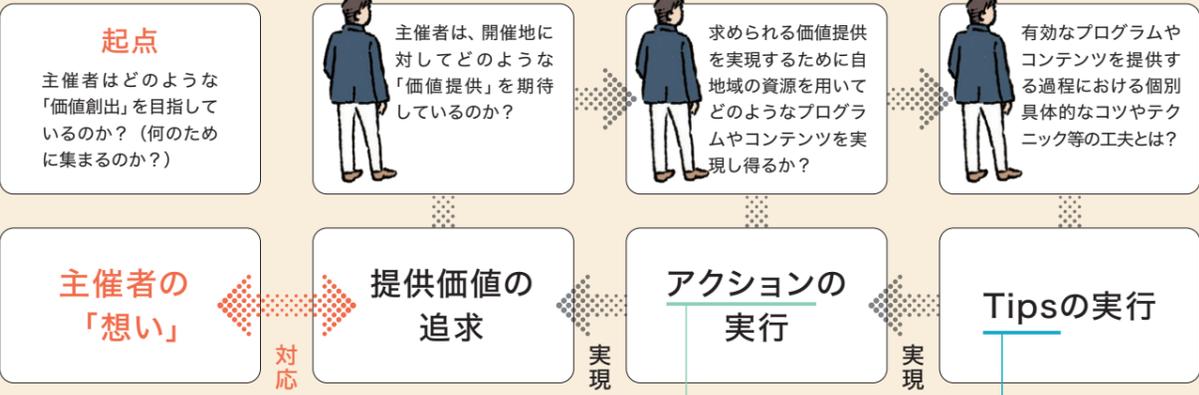


## 主催者が開催地を決定するまでのプロセスと開催地側の打ち手



「国際会議誘致競争力」強化策の柱(1)

主催者の「想い」に寄り添う価値提供の推進



**観点①-1**

今日のトレンドを踏まえた主催者の一般的な「想い」に合致した優れた価値提供のため、有効な「アクション(コンテンツ・プログラム)」としてどのようなものが挙げられるか。なかでも①ユニークベニューの特色ある活用と②エクスカッション・テクニカルビジットの充実の有効性に焦点を置く。

どのような国際会議にも、主催者による何らかの開催目的が存在します。つまり、主催者にとっての開催地の決め手とは、「その都市において、そうした開催目的を具現化することができるか否か」というポイントが根幹であり、開催地側には、そうした目的に合致する価値の創出に取り組む主体としての能力や姿勢が期待されていると言えるでしょう。

優れた価値提供を実現するための具体的な仕掛け(コンテンツやプログラム等)に関するヒントは、この冊子で紹介されている具体的な事例から学ぶことができます。なかでもその土地ならではのエクスカッション・テクニカルビジットを通じて参加者が同じ時間や特別な経験を共有する機会を提供することで、参加者満

**観点①-2**

今日のトレンドを踏まえた国際会議運営における「Tips(工夫)」として、どのようなものが挙げられるか。実証における成功・失敗を参考に「アクション」に関連する事項を中心に整理を試みる。なかでも①ステークホルダー間の連携拡大・深化と②広域連携の有効性に焦点を置く。

価値創出にあたって企画・準備・運営の現場には、それらを実際に具現化するためのさまざまなTips(工夫)が存在すると言えるでしょう。

国際会議の「高度化」は業界内でも時間をかけて挑戦が続けられてきたテーマと言えます。しかしながら、コロナ禍を経験した社会においては、対面型の国際会議の開催意義というポイントがより一層、深く検討されるようになり、それとともに「開催成果の最大化」という意識がより前面に現れてきているものと考えられます。既存の業界ステークホルダー間での連携は従来より存在するものですが、そうした大きな環境変化のもとで連携の程度や水準という意味での「縦軸」の深化にとどまらず、より広義の、幅広い形での連携による「横軸」の



強化策の柱(2)

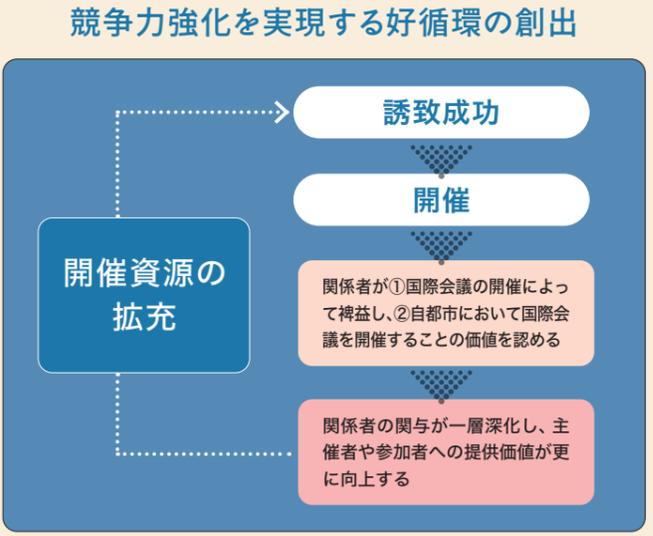
「好循環」を生み出し続ける土壌を育む



**「手応え」に基づく、域内ステークホルダーの意識と行動の変革**

自都市の開催資源を生かして主催者の「想い」(その価値観や開催のねらい)に合致した国際会議を具現化し、その開催目的を満たす価値提供に意識的に取り組むことに大きな価値があるのだ

「自都市における国際会議の開催」を手段として、自都市のありたい姿(得たい開催成果)の実現をはかっていこう



ステークホルダー間の連携はそれ自体が目的ではなく、主催者や参加者に対してより大きな価値を提供するために有効なアプローチと位置付けられます。それでは、その「連携」を実現するためには何が必要なのでしょうか。

まず、その基盤として、国際会議の開催に自ら関与することのメリットを各々に見出してもらうことが挙げられるでしょう。ステークホルダーそれぞれの立場から魅力的であると感じるメリットは当然ながら異なっており、それは直接的な金銭面での利益であると

も限りません。国際会議の開催という機会を生かして、各々がそれぞれ裨益すること自体が重要であり、それによって自都市において国際会議が開催されることに対する理解醸成が進展すると言えるでしょう。そうした基盤があってこそ、ステークホルダーの関与の深化による開催資源の拡充は確かな道筋となり、こうした文脈での地域一丸となつての提供価値の拡大が期待されます。なお、国際会議の開催に対する地域の理解醸成が進むことは、受け入れ体制を面的に改善していくための推

進力にもなると言えるでしょう。

国際会議の開催を通じて、それまで自都市と直接つながりのなかったような人々が国内外から多数来訪したり、新たに接点を得たりすることができるという機会において、開催地側が主体的にその「開催成果の最大化」を模索し、開催地としてのさらなる魅力向上につながる「好循環」を創出・強化することがすなわち、国際会議誘致競争力につながっていくと言えるでしょう。

ステークホルダー間連携強化の有効性

ステークホルダーとの価値創造の営みの深化を通じて自らが生み出す価値を強化するという生存戦略の有効性と必要性が指摘されています。



# 採択された各国際会議の 〈参加者アンケート結果〉



本事業では、採択された各国際会議の参加者に対してアンケート調査を実施しました。そのデータも引用しながら国際会議誘致競争力の強化に向けたポイントをさらに整理していきます。



## 調査概要

調査目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>採択された各国際会議において実施されたさまざまな取り組みに対する参加者の反応を把握し、それらの有望性や改善の方向性についての検討材料とする。</li> <li>コロナ禍を経験した社会における国際会議参加者の最新のニーズや動態等を把握する。</li> </ul>
調査対象	採択された各国際会議における会議登録者（同伴登録者を含む）
調査期間	採択された各国際会議の開催期間から会期終了後1か月を目安に実施
調査方法	主催者を介して調査対象者にインターネット上に開設した専用オンライン回答フォームURLを周知し、回答を得た。なお、一部の会議においては、オンライン回答フォームと同一内容構成の紙調査票を対面で配付し、その場で回収を行った。

※回答者(2,856名)の属性は以下の通りだが、①大規模に開催された会議の参加者による回答が占める割合が高くなっている点と②海外居住者の国別では中国(19.2%)・米国(14.8%)・韓国(7.3%)・ドイツ(7.3%)・英国(4.6%)からの参加者による回答が多く得られている点には留意されたい。

## 回答者内訳

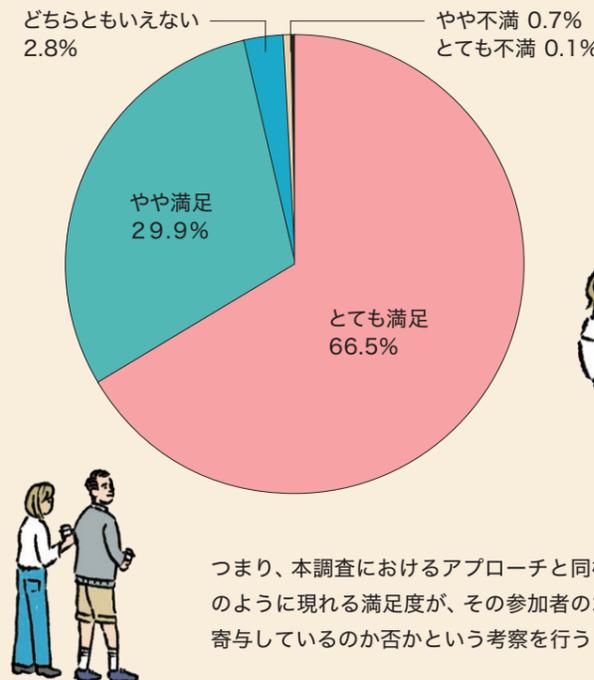
(人)

居住地		居住地							
		日本	アジア (日本を除く)	オセアニア	北米	中南米	欧州	中東	アフリカ
Q1 性別	男性	1449	583	57	260	18	468	11	10
	女性	1152	370	27	159	12	307	8	8
	その他	6	1	0	3	0	3	0	0
Q2 年代	10代以下	6	1	0	1	0	0	0	0
	20代	397	154	10	60	3	89	3	2
	30代	269	177	17	66	1	145	4	5
	40代	314	109	12	46	7	97	1	3
	50代	301	99	7	38	3	89	1	0
	60代	136	35	10	41	3	41	1	0
	70代以上	26	8	1	8	1	7	1	0

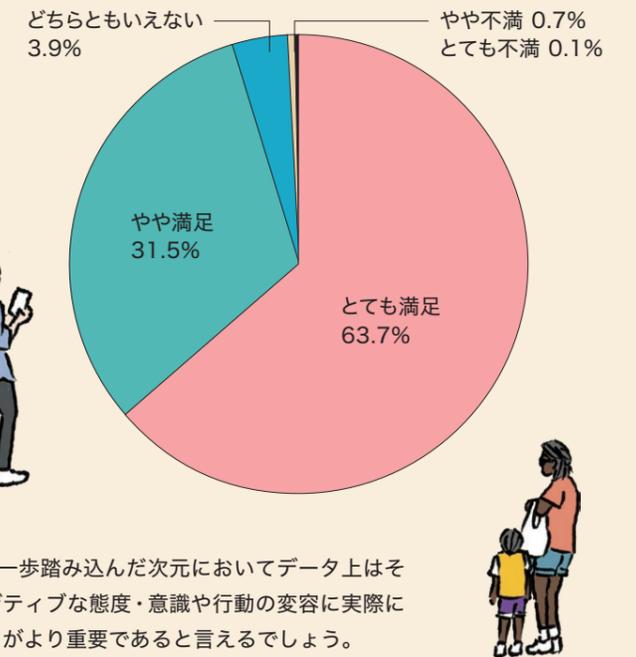
# 「参加者満足度」の捉え方・生かし方

誘致競争力の向上という観点においては、主催者や参加者の評価(フィードバック)を確認し、満足要因と不満要因をそれぞれ把握した上で改善を重ねていくことが重要と言えます。しかしながら、本事業において採択された各国際会議に関してもそうであった通り、参加者満足度は「とても満足」「やや満足」が占める割合が一般的に高いと言え、目立って不満が示されるケースは限定的であると考えられます。

Q この会議全体の総合的な満足度を選択してください。



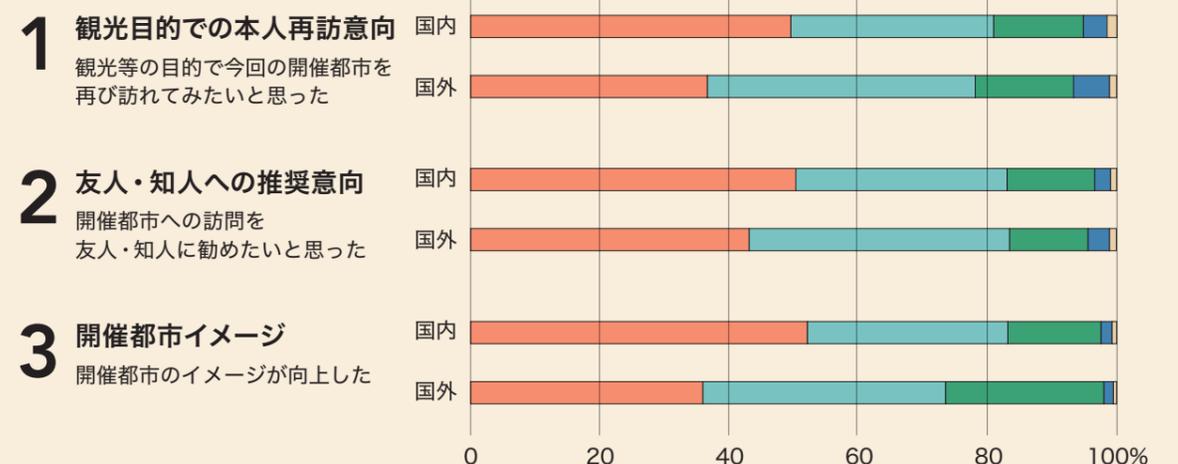
Q あなたが参加したこのプログラム\*の満足度を選択してください。  
※「本事業を活用して実施されたソーシャルプログラム」を指します。



つまり、本調査におけるアプローチと同様、一歩踏み込んだ次元においてデータ上はどのように現れる満足度が、その参加者のポジティブな態度・意識や行動の変容に実際に寄与しているのか否かという考察を行うことがより重要であると言えるでしょう。

Q このプログラムに参加したことで、あてはまるものを選択してください。

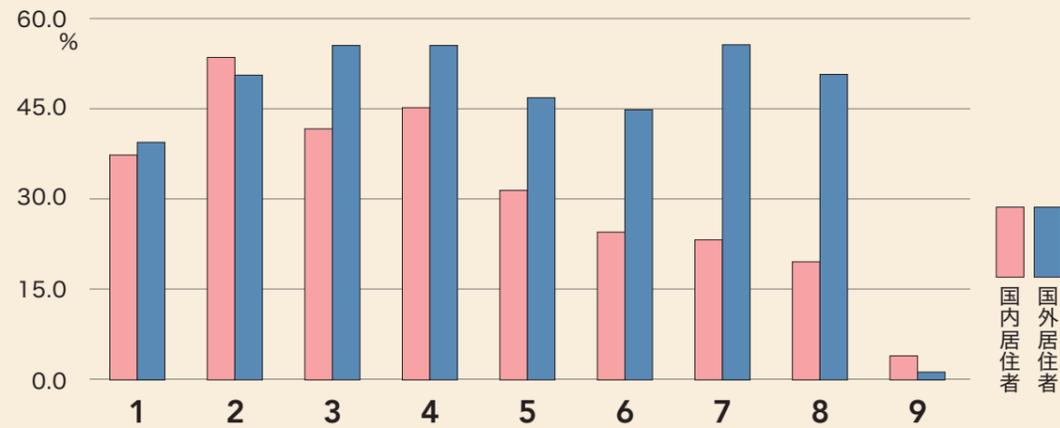
■ そう思う    ■ あまりそう思わない  
■ ややそう思う    ■ まったくそう思わない  
■ どちらともいえない



本事業において採択された各国際会議においても、多様な取り組みが実施されており、それらを通じて参加者が実際に経験したことの中身によって、こういった態度・意識や行動変化が誘発されるかという成果に関しては当然、異なってくると言えます。参加者のそうした変化については、本番の現場における肌感のみならず、参加者アンケートの集計データや開催後の主催者や関連事業者に対するヒアリング等を通じて得られた情報などを突き合わせることで定量・定性両側面から考察を試み、その結果を地域のステークホルダー間で共有し合うことも誘致競争力強化を実現する「好循環」を維持・強化する観点から重要と言えるでしょう。



**Q** このプログラムに参加したことによるあなたの変化として、あてはまるものがあれば全て選択してください。



項目	n=2,761	(人)	
		国内	国外
1 開催都市の名産品を購入してみたくなった	1064	517	547
2 開催都市の他の飲食店にも行ってみたいと思った	1436	737	699
3 開催都市の他の文化施設(美術館・博物館など)にも行ってみたいと思った	1342	574	768
4 開催都市の他の観光スポット(寺社仏閣含む)にも訪れてみたいと思った	1396	625	771
5 他にも開催都市の歴史・伝統文化に触れる体験をしてみたいと思った	1080	433	647
6 他にも開催都市の自然に触れる体験をしてみたいと思った	962	339	623
7 開催都市以外にも日本国内の地域を訪れ、日本の歴史・伝統文化に触れる体験をしてみたいと思った	1094	323	771
8 開催都市以外にも日本国内の地域を訪れ、日本の自然に触れる体験をしてみたいと思った	972	272	700
9 その他	72	54	18

直接的な成果として見えやすい開催地関連商品の購買意欲に係る変化については、後述のUV30における取り組みを参照されたい。

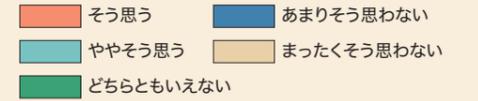
国外居住者については、開催都市において国際会議のプログラムを通じて何らかの価値ある経験をすることは、開催都市以外の国内他地域への訪問意向を促進することに寄与し得ることが確認できる。そうした意欲を低減させずに再訪につなげていくことが重要と言える。

国際会議の開催という機会を通じて、どのような成果を得たいのかという点を意識することが重要と言える。

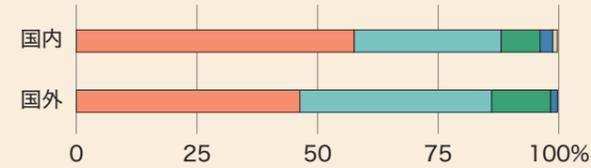
※どの国際会議(こういった態度・意識や行動変容に有効な仕掛けがなされたものか)の参加者であるかということで区別せず、単純に合算した合計値である点に留意されたい。

## 国際会議参加者に対する理解

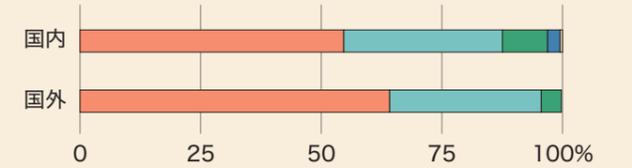
本事業におけるアンケート調査結果に基づき、我が国で開催される国際会議参加者の一般的な価値観や行動について、注目すべきトピックスを整理しました。



**Q** 歴史的建造物・文化施設・公的空間などの「ユニークベニュー」を活用した国際会議やソーシャルプログラムの実施に魅力を感じる。

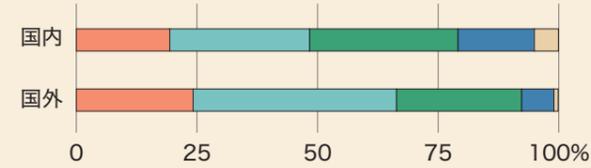


**Q** 国際会議のプログラムのなかでも、自身は特に他の出席者との交流機会(ネットワーキング)を重視している。

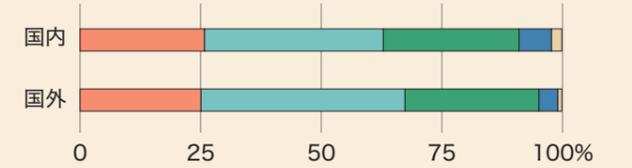


ネットワーキングの機会としての価値を感じ、国際会議に参加している参加者の割合が国内居住者・国外居住者いずれも9割(「そう思う」+「ややそう思う」)を超えており、なかでも北米・欧州居住者はアジア居住者よりも高い水準を示しています。よって、そうした観点において十分な満足を得てもらうために開催都市としてどのようなプログラムやコンテンツを提供し得るのか、体系立ててアピールしていくことが重要と考えられます。そのための工夫のひとつとして、ユニークベニューの活用は、有効な戦術と言えるでしょう。

**Q** 国際会議のプログラムのなかでも、自身はエクスカージョンを特に重視している。

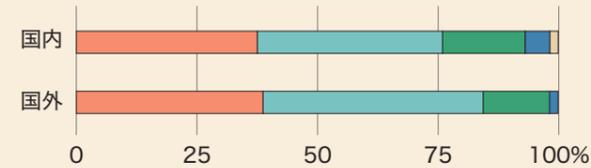


**Q** 国際会議のプログラムのなかでも、自身は特にテクニカルビジットを重視している。



エクスカージョンとテクニカルビジットの重視度について、国内居住者と国外居住者で若干の差が見られるのは、日本を除くアジア居住者が国内居住者や欧米居住者と比較しても10~20%程度高い水準を本調査では示しているためです。アジア居住者(日本を除く)は、漠然とした「ネットワーキング」の機会というよりもエクスカージョンやテクニカルビジットの中身やそれ自体の面白さ(自身の興味・関心に合っているか)に、より重きを置いているものと考えられます。

**Q** 今日における国際会議は、サステナビリティ(持続可能性)やSDGsにも十分に配慮した運営がなされるべきだ。



**Q** 今日における国際会議は、市民向け公開講座等のプログラムを開催するなど、開催都市への貢献にも配慮すべきだ。



サステナビリティ(持続可能性)に配慮した国際会議のあり方や、広義にはそうした価値観にも関連する開催都市への貢献については、参加者自身も概ね賛同していることが分かります。特にアジア居住者(日本を除く)は、開催都市への貢献をより肯定的(「そう思う」+「ややそう思う」)に捉えている割合が高い傾向が見られました。ただし、主催者においてはそれらの意識に濃淡があるとも指摘されていることから、開催都市はサステナビリティを加味した会議運営上の工夫について、主催者やPCOの求めるところに合致する水準の具体的な選択肢を提示することができるように備えておくことが期待されると言えるでしょう。



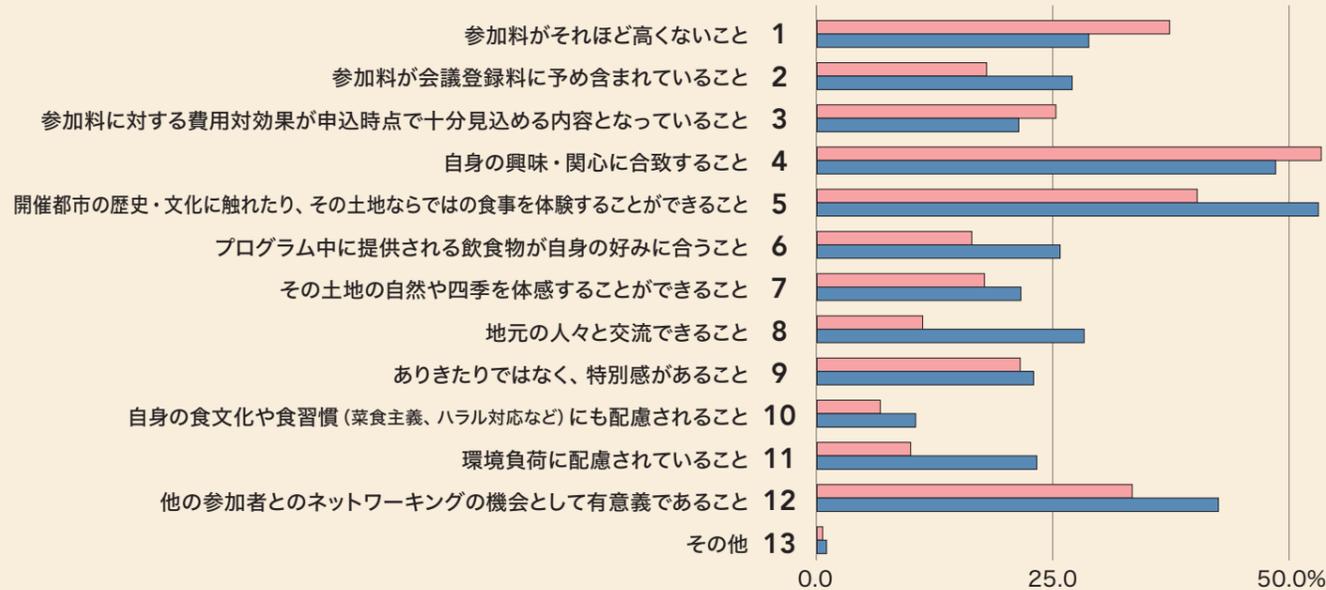


ソーシャルプログラムについては、①「(参加者)自身の興味・関心に合致すること」、②「他の参加者とのネットワーキングの機会として有意義であること」、③「開催都市の歴史・文化に触れたり、その土地ならではの食事を体験することができること」の3要素が特に重要であることが分かります。企画内容を検討する段階のみならず、実際の告知や参加募集にあたってこの点を意識した情報提供などの取り組みが必要と考えられます。

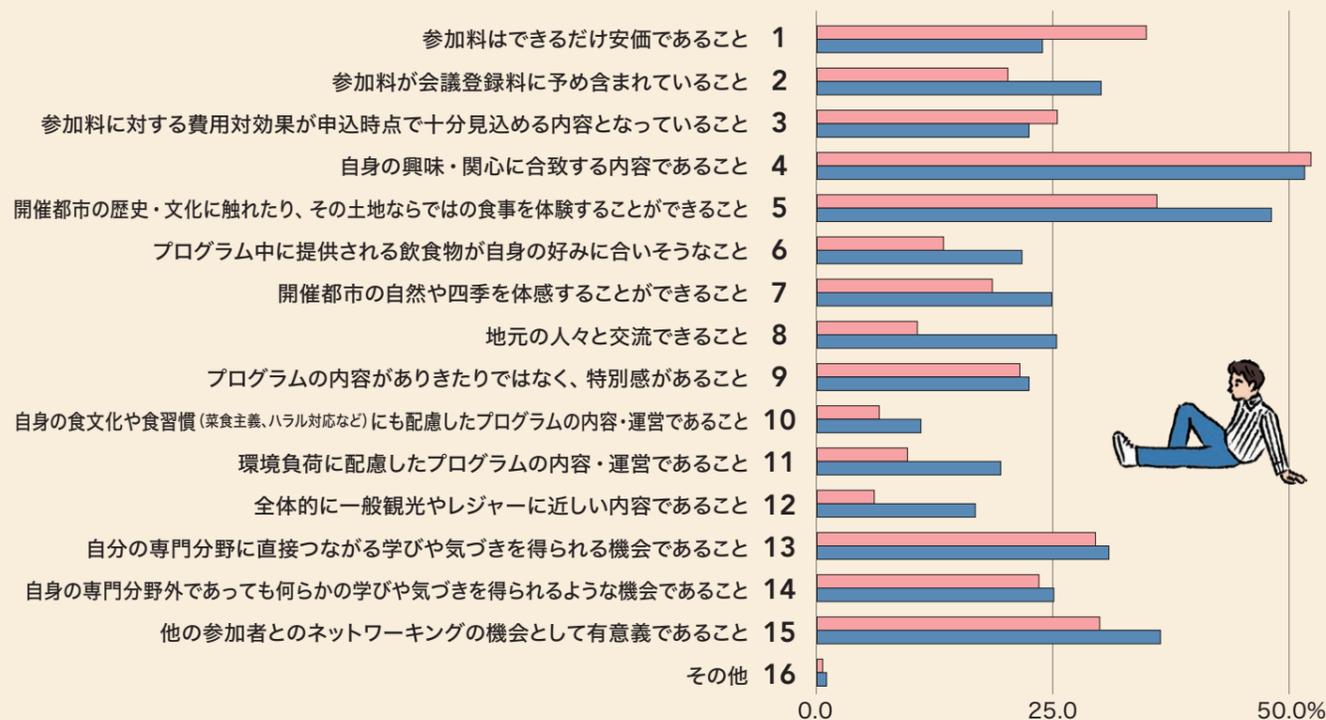


あなたが、歴史的建造物・文化施設・公的空間などの「ユニークベニュー」を活用した国際会議やソーシャルプログラムに期待することを教えてください。

国内居住者  
国外居住者



あなたが、国際会議のエクスカージョンやテクニカルビジットに期待することを教えてください。



開催効果の拡大につながり得る因子のひとつとして、会議前後における「滞在時間の長期化」が挙げられます。

開催地もしくはその周辺において、業務目的以外で国内居住者・国外居住者ともにおよそ3割程度が前泊、また国内居住者の2割と国外居住者の4割弱が後泊しています。

泊数については居住地による差が見られ、国内居住者が平均1泊であるところ、国外居住者は平均2泊以上となっていることから前泊・後泊の拡大を目指す場合には、国外居住者を意識した情報提供等を強化する必要もあると考えられます。

前泊もしくは後泊を決めたタイミングとしては、3か月以前が最も多く、1か月前までにはおよそ8割の回答者が判断を済ませています。そのため、前泊・後泊を促す情報提供は、レジストレーションの開始時期も意識しながら早期から行う必要がある

と言えます。

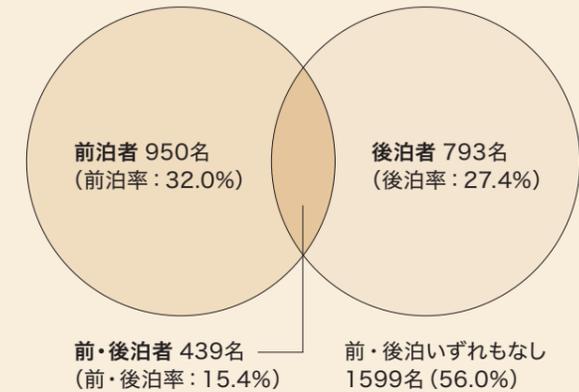
延泊の検討に関する情報源としては、会議公式ホームページが最も参照されており、各宿泊施設サイトが続いています。例えば、会議公式ホームページにおいても単に域内の宿泊施設情報を羅列するのみならず、例えば、滞在を1日延ばすことでどのような体験が可能なのかという具体的な過ごし方に関する情報提供等を行うことでそのさらなる促進が期待できるものと考えられます。そのため、開催地側としては各会議公式ホームページへの情報提供やURLリンクの設置による自都市の観光情報サイトへの誘導など早い段階から工夫を行う必要があると言えるでしょう。



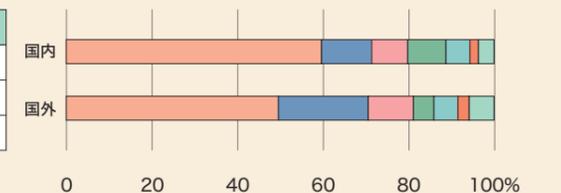
この会議の会期前後に開催都市およびその近郊に業務目的以外で前泊・後泊しましたか(する予定ですか)。



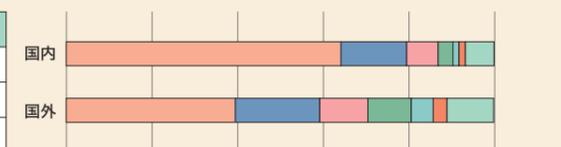
		前泊		後泊	
		はい	いいえ	はい	いいえ
全体	2856名	32.0%	68.0%	27.4%	72.6%
国内居住者	1449名	30.3%	69.7%	19.0%	81.0%
国外居住者	1407名	33.7%	66.3%	36.0%	64.0%



	前泊	泊数						
		1泊	2泊	3泊	4泊	5泊	6泊	7泊以上
全体	950名	54.2%	16.6%	9.4%	6.8%	5.7%	2.1%	5.2%
国内居住者	447名	59.5%	11.9%	8.3%	8.9%	5.6%	1.8%	4.0%
国外居住者	503名	49.5%	20.9%	10.3%	5.0%	5.8%	2.4%	6.2%



	後泊	泊数						
		1泊	2泊	3泊	4泊	5泊	6泊	7泊以上
全体	793名	48.3%	18.2%	9.7%	7.8%	3.8%	2.8%	9.5%
国内居住者	279名	64.2%	15.4%	7.2%	3.6%	1.4%	1.4%	6.8%
国外居住者	514名	39.7%	19.6%	11.1%	10.1%	5.1%	3.5%	10.9%

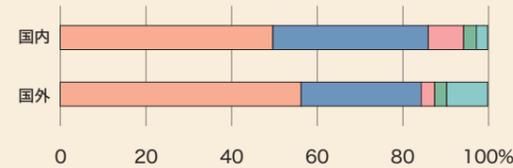




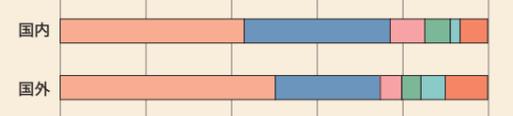
この会議の開催都市およびその近郊における前泊・後泊を決めたタイミングを選択してください。



前泊		3か月前まで	1か月前まで	2週間前まで	1週間前まで	前日まで	会議開催期間中
国内居住者	439名	49.9%	36.4%	8.0%	3.2%	2.5%	0.0%
国外居住者	474名	56.1%	28.3%	3.2%	3.0%	9.5%	0.0%



後泊		3か月前まで	1か月前まで	2週間前まで	1週間前まで	前日まで	会議開催期間中
国内居住者	276名	42.8%	34.1%	8.0%	6.2%	2.2%	6.9%
国外居住者	507名	50.1%	24.5%	4.9%	4.5%	5.7%	10.3%



この会議の開催都市およびその近郊に前泊・後泊するための情報収集において、役に立った情報源を全て選択してください。

\*複数回答可

国内居住者	情報源(上位5位まで抽出)	国外居住者
1位 36.7%	国際会議の公式ウェブサイト	1位 48.6%
	日本政府観光局のウェブサイト	2位 27.3%
2位 34.0%	宿泊予約のサイト	
3位 26.3%	宿泊施設のウェブサイト	4位 23.9%
4位 11.7%	旅行代理店のウェブサイト	
5位 10.7%	口コミサイト(トリップアドバイザーなど)	3位 25.9%
	旅行ガイドブック/自国の親戚・知人	5位 16.1%



EX …… エクスカーション  
UV …… ユニークベニュー  
地域 …… 地域参加プログラム

## 令和5年度採択事業一覧マップ

国際会議誘致競争力向上に向けた01~38の実証事業を紹介



## EX04・地域04

宮城 × 松島 / 震災遺構 大川小学校

震災遺構への訪問を通じ  
復興と地域医療を学ぶ機会に

## 第6回環境応答国際シンポジウム

仙台市で開催された「環境応答国際シンポジウム」にて、エクスカッションと市民公開講座を開催。エクスカッションでは紅葉の季節の松島を訪れ、美しい四季を体験してもらった。その後、東日本大震災の震災遺構である大川小学校、震災をきっかけとして発足した東北大学東北メディカル・メガバンク機構 (ToMMo) の地域支援多賀城センターを訪問し、震災後の地域医療について学んだ。市民およびシンポジウム参加者を対象とした市民公開講座を開催し、JAXA 研究者および大学研究者を招いて、マウス宇宙ミッションを伴う共同研究について、パネルディスカッションを行った。市民公開講座の企画モデルとして今後の継続も期待される。

## DATA

会議名称  
第6回環境応答国際シンポジウム  
主催者  
第6回環境応答国際シンポジウム組織委員会  
コンベンションビューロー  
公益財団法人 仙台観光国際協会  
MICE推進部 (仙台コンベンションビューロー)  
会議会期  
2023/11/3-11/5  
会議会場名  
東北大学 星陵キャンパス 星陵会館  
実証プログラム会場名  
松島、震災遺構 大川小学校  
実証プログラム参加者数  
国内からの参加者30名  
国外居住者30名  
実証プログラム実施一人当たり金額  
38,333円



## SCHEDULE

	Day1 第6回環境応答国際シンポジウム	Day2 第6回環境応答国際シンポジウム
8:00	セッション: KEAP1-NRF2 システムと医薬品開発	ホテル出発
9:00		石巻市震災遺構 大川小学校
10:00	セッション: KEAP1-NRF2 システムと医薬品開発	石巻から松島に移動
11:00		ランチ
12:00		フリータイム (円通院での紅葉)
13:00	公開講座「宇宙と健康」	松島から多賀城へ移動 技術訪問: ToMMo地域支援多賀城センター
14:00		仙台駅にて解散
15:00	東北大学 星陵キャンパス集合 星陵キャンパスから松島へ移動	
16:00		
17:00	瑞巖寺(夜のライトアップ)	
18:00	ホテル松島大観荘 到着・宿泊	

## EX・地域参加プログラム選定の経緯

宮城県の美しい自然に加え  
震災の遺構を訪ね  
その被害と復興を学ぶ行程に

生体防御システムの研究者が数年に一度集結する国際会議「環境応答国際シンポジウム」。過去3回、仙台で開催しましたが、エクスカッションについては学内施設の見学に留まり、参加者に開催都市を紹介する積極的な取り組みはありませんでした。シンポジウム自体の準備に加え、エクスカッションの企画を立てるのはとても大変ですし、予算の点でも開催は難しかったのですが、今回初の試みとしてエクスカッションを企画することができました。

エクスカッションは海外からのシンポジウム参加者を主な対象として参加を募り、会場から車で1時間ほど離れた日本三景のひとつである松島(宮城郡松島町)を訪れ、翌日、震災遺構である大川小学校(石巻市)、ToMMoの地域支援多賀城センター(多賀城市)を訪問し、東日本大震災の甚大な被害と震災後の地域医療について学ぶ機会としました。

参加者の多くはこれまで仙台を複数回来訪したことがあるものの、このコース



公開講座の中継先である仙台天文台でも、JAXAによる展示や顔出しパネルの設置などを行った。中学生以上を対象としたが、親子で参加する小学生の姿も見られ、幅広い層に楽しんでもらえた。

は全員が初めての行程となります。仙台市の周辺は温泉にも恵まれた自然豊かな街であること、そして震災からの復興のシンボルとして世界をリードする未来型医療に取り組んでいる日本と宮城の魅力伝えたいという思いでコースを選定しました。

市民講座では  
一般の方も会議参加者も  
楽しめるテーマを模索

また、もうひとつの取り組みとして行ったのが市民公開講座です。私たち研究者は国の予算を使って基礎研究をしています。ですから、国民の皆様にも研究やその経過を伝えることも行っていかねばならないと思うのですが、一般の方々にわかりやすくご紹介するのは、内容、レベル共に難しく、悩ましいところです。今回、一般の方々にも興味を持っていただけそうなJAXAとのマウス宇宙ミッションを伴う共同研究の成果と、ヒトの健康長寿研究への還元について、JAXA 研究者および大学研究者を招いてパネルディスカッションをすることとしました。講座は会議参加者も受講可能でしたが、参加者が宇宙の専門家や研究者ではなく生物系の研究者であるため、一般の参加者とともに新たな知見を得ることを楽し

## 取材対象者①

## 田口恵子さん

東北大学  
東北メディカル・  
メガバンク機構  
客員准教授



博士号を取得後、山本雅之教授の研究室にて生体における環境応答機構の研究に従事。環境応答国際シンポジウムには博士課程の大学院生だった第1回から参加。第5-6回環境応答国際シンポジウムの事務局を務めた。現 東京大学農学生命科学研究科応用生命化学専攻 准教授。

めると判断しました。

## 実施内容・運営について

被災地を中心とした県の  
地域医療再建と健康支援の  
取り組みを紹介

シンポジウム参加者142名(海外57名・国内85名)のうち、エクスカッションには49名(海外25名・国内24名)が参加しました。

会議最終日の夕方に出発し、夜に国宝瑞巖寺(宮城郡松島町)のライトアップ見学を行い、限られた時間の中でも宮



瑞巖寺のライトアップイベントに参加し、日中とは違う幻想的な雰囲気を楽しんだ。拝観者には数名にひとつ提灯がわたされ、松島ボランティアガイドの説明を聞きながら境内を散策した。

城・松島を美しくアピールする機会を設けました。翌日、震災遺構 大川小学校(石巻市)で当時の被害やその後の取り組みを学習し、ToMMoの地域支援多賀城センターを訪問しました。

訪問先への理解を深めてもらうため「旅のしおり」を作成し、移動中のバスの中では、(公財)仙台国際観光協会職員のアナウンサー・ベルガス氏が、日本および仙台の文化、歴史などの解説を行い、大川小学校や震災時の写真を掲載した写真集の閲覧をしました。

大川小学校では自身の次女を亡くした語り部・佐藤氏のお話を伺い、アナウンサー・ベルガス氏が通訳を行いました。その後、震災をきっかけに発足したToMMoが目指す、被災地を中心とした宮城県の



地域医療再建と健康支援の取り組みなどを紹介しました。

### 市民講座では JAXAの研究員を迎え 共同研究について講演を

仙台市には仙台市天文台、角田市にはJAXA角田宇宙センターがあり、天文・宇宙に関心が高い土地柄であることから、市民講座は研究と絡めて「宇宙と健康」というテーマで開催することにしました。宇宙実験でご活躍のJAXA研究員および大学研究者をお迎えして、国際宇宙ステーション「きぼう」日本実験棟での長期飼育マウスの研究成果とヒト健康長寿研究への還元についてお話しいただきました。



仙台で東北大学が宇宙実験に携わっていることを市民に伝える機会はまだにあまりなかったので、市民が参加できる良い機会となりました。仙台市天文台の協力を得て、アカデミアの国際シンポジウムを一般市民にも公開することは、市民公開講座の企画モデルとして今後の活動につながりそうです。また、マウス宇宙ミッションに従事できる研究者は少ないので、会議参加者にとっても興味を持ってもらえる内容で、好評を博しました。

国際宇宙ステーションにおけるマウス宇宙ミッションは今も継続しているので、今後の本シンポジウムシリーズで、また進捗を報告する機会を設けることができたらと考えています。



松島での昼食の様子。和風の趣あるお食事処は、海外からの参加者にも好評だった。昼食後は円通院の散策も行い、食と景観の両方で松島を満喫した。

3

### 得られた成果と課題、今後のビジョン

#### 外国人参加者はもちろん 日本人にとっても 震災を知る貴重な機会に

シンポジウムの主催者は生体防御システムに関する長年の研究活動を通して、世界中の研究者とネットワークを構築しています。エクスカーションを通じて、ToMMoと東日本大震災の関わりや、地域支援センターにおける被災地との密着性、新たな食ビジネスとして事業化を目指す防災食×宇宙食の開発を参加者に知ってもらうことができました。

日本人の参加者も大川小学校に足を運んだのは初めての経験で、特に幼少期だったために実体験としての記憶が薄い学生たちにとって、今までテレビで見聞きしていなかったことを実際に現場に行き見聞きすることはよい機会となりました。また、外国人参加者の中には地震を経験したことのない方もいらっしゃいますので、「本当にここに連れてきてくれてありがとう」と言われたくらい、貴重な体験となったようです。そして、その震災の被害を伝えるだけでなく、そこから日本がどうやって立ち上がっていくかというところで、メディカル・メガバンクという我々の研究とつながる場所を紹介でき、意義のあるエクスカーションとなりました。

#### 有意義ではあるが 一から作り上げることの 負担の大きさが課題

研究費をいただく立場として、市民講座の開催は実績となりますし、私たちの研究と世の中の興味がどれくらい結びついているのかわかるよい機会にもなりました。ただし、今後こうした取り組みを続けていくには、課題もあります。

第一に予算の問題。そもそもシンポジウム自体を開催するための予算を集めるだけでも大変な労力がかかり、さらにプラスしてエクスカーションの予算を獲得するのはとても難しいことです。旅費をかけて訪日している海外からの参加者に、エクスカーション代としてプラスアルファの支払いを求めるのも心苦しいところがあります。

第二に企画することの負担の大きさです。私たちはこういったイベントのプロではないので、何をやるにもまず誰にコンタクトすればよいのかを調べるところから始まり、一から足場を作らなければならず、大きな負担になったことも事実です。今回は運営会社の方などにご協力いただいて作り上げたのですが、継続するにはプロの方のサポートが必須と考えます。

エクスカーションや市民講座の開催は、シンポジウム参加者にもとても好評で、シンポジウムは2026年に次の開催が決まっていますが、そのときもぜひエクスカーションや市民公開講座を開催してほしいと言われています。課題の解決策を模索しながら、会議参加者にとっても市民の皆様にとってもよい形で開催できればと思っています。



紅葉や海など、仙台市の周辺は温泉にも恵まれた自然豊かな街であることを体験してもらう機会となった。

#### 取材対象者②

#### 主催者の負担を減らす システム構築を目指す

中尾優美子さん  
公益財団法人  
仙台観光国際協会  
MICE推進課長



仙台生まれ仙台育ち。コンベンションビューローのプロパー職員として長年MICEの誘致・支援に携わる。

現在、MICEというものがないか市民に浸透していない状況で、関係者だけでなく市民の方々にMICEの存在を知っていただくことはとても重要だと考えています。仙台市は市民公開講座開催に積極的な大学が多く、高い知的レベルで学びたいという市民の方も多いと思います。国際学会の際に定期的に市民公開講座が開かれるようになると、「地元で国際学会が開催されるのが市民の学ぶ機会になる」という認識が広がるのではないかと思います。仙台観光国際協会(当協会)では学会が市民公開講座を開催する際の助成金制度も準備しておりますので、これからも積極的に進めてまいります。

エクスカーションについては、やはりせっかく仙台にいらしていただいたら、仙台や宮城県のいろいろな面を見ていただきたいし、その良さを味わっていただきたい。仙台を知っていただくことや、エクスカーションを通して地元で消費していただくことは、経済効果としても大きなことです。ただ、市民公開講座、エクスカーションともに予算の確保と主催者様の負担が課題となっています。ツアーをパッケージ化して、訪問先やイベントなど、担当者や費用を見える化して、主催者がニーズに合わせてカスタマイズできるようにシステムづくりを進めていきたいと思っています。

先生のお話にもあったように、企画を一から作るのはとても大変なことですが、今回、事例ができたということによって一歩を踏み出せたと思っています。成功事例がどんどん増えていけば、何ができるのかも明確になりますので、コンベンションビューローとしてはそれを実績として、次回開催時に提案できるように努めてまいります。

震災遺構大川小学校を見下ろす高台の避難スペースにて語り部佐藤さんの説明を、アナウンサー・ベルガス氏の通訳により聞き入る参加者。その後訪れたToMMoへの理解も深まる機会となった。



## UV03

青森 × 特別史跡三内丸山遺跡／ねぶたの家 ワ・ラッセ

文化観光交流施設の活用により  
食や伝統芸能で青森を満喫

グローバルプラズマフォーラム in 青森

2023年10月に国際会議「グローバルプラズマフォーラム in 青森」を開催するにあたり、会場としてともに青森市にある特別史跡三内丸山遺跡と青森市文化観光交流施設「ねぶたの家 ワ・ラッセ」を活用するプログラムを立案した。三内丸山遺跡を活用することにより、1万年以上平和な生活を維持し、SDGsの観点からも注目を集める縄文文明に思いを馳せるとともに、その文明を支えた「火」と対比する形で、持続可能な現代文明を支えるプラズマについてさまざまな講演・意見交換・共同研究マッチングなどを行うことができた。また、パンケットやイベントでは、食や伝統芸能などを通じて、五感で青森を体験できるコンテンツを用意し、大好評を博した。

## DATA

会議名称  
グローバルプラズマフォーラム in 青森  
主催者  
グローバルプラズマフォーラム in 青森  
開催実行委員会  
コンベンションビューロー  
公益社団法人 青森観光コンベンション協会  
会議会期  
2023/10/15-10/18  
会議会場名  
青森市文化観光交流施設 ねぶたの家ワ・ラッセ、  
特別史跡 三内丸山遺跡  
実証プログラム会場名  
青森市文化観光交流施設 ねぶたの家ワ・ラッセ、  
特別史跡 三内丸山遺跡  
実証プログラム参加者数  
国内からの参加者106名  
国外居住者70名  
実証プログラム実施一人当たり金額  
70,441円



## SCHEDULE

	Day3	Day4
9:00	ポスターセッション "Meet the AOMORI" 共同研究マッチングイベント	基調講演 (2件)
10:00	コーヒープレイク	コーヒープレイク
11:00	昼食 (会場付近で各自)	パラレルセッション (4会場)
12:00		昼食 (会場付近で各自)
13:00	会場集合 乗り合いバス出発 (三内丸山遺跡へ)	基調講演 (2件)
14:00	三内丸山遺跡にて自由行動 海外からの参加者を中心に 勾玉づくり体験 (2グループ)	パラレルセッション (4会場)
15:00		閉会式、若手優秀発表賞授賞式
17:00	乗り合いバス出発 (ねぶたの家ワ・ラッセへ)	
18:00	"Feel and Enjoy AOMORI" パンケット	
19:00	ねぶたミュージアムに会場移動	

## 1

## UV選定の経緯

ハード・ソフト両面で  
青森市の特別史跡  
三内丸山遺跡の活用を实践

プラズマ核融合と低温プラズマ科学の2つの国際ネットワークを1つに束ねて拡大的な国際ネットワークを構築するための枠組みを模索する国際会議「グローバルプラズマフォーラム in 青森」が2023年10月に青森市で開催されました。

メイン会場にはイベントホールや講演に適した部屋を備え、伝統芸能も楽しめる青森市文化観光交流施設「ねぶたの家ワ・ラッセ」を採用し、ユニークベニューとして青森市にある特別史跡三内丸山遺跡の活用を立案しました。

当初は「青森と言えば三内丸山遺跡」という思いからの提案でしたが、SDGsの観点からも注目されている縄文文明とそれを支えた「火」は、持続可能な現代文明を支える「プラズマ」との共通項もあり、この国際会議との親和性からも最適な場所であったと思います。また、後述する市民講演会に三内丸山遺跡センター



所長・岡田康博氏に登壇いただくなど、ハードとソフト両面での三内丸山遺跡の活用を实践することができました。

## 2

## 実施内容・運営について

会議初日には  
市民向けの講演会と  
科学実験を開催

会議の開会式に先駆け10月15日に三内丸山遺跡センター所長・岡田康博氏、名古屋大学低温プラズマ科学研究センター特任教授・堀勝氏による「人類文明の礎：縄文の火、現代のプラズマ」と題した市民講演会 (日本語) を開催しました。一般の方々にもプラズマについて知っていただきたい思いはありつつ、それだけでは知名度的にも集客が難しいと考え、青森の皆様にも親しみのある三内丸山遺跡とカップリングすることで、プラズマにも興味を持っていただけるのではないかとテーマを選定しました。1万年以上にわたる縄文文明を支えた火と、現代のさまざまな産業で活用されているプラズマから持続文明の礎を探る内容としました。

## 取材対象者①

## 横山雅之さん

グローバル  
プラズマフォーラム  
in 青森開催実行  
委員会  
現地実行委員長



高校物理の授業で核融合のことを知って以来、核融合エネルギーの実現を志し、現在、青森県六ヶ所村にある研究施設でその研究に従事している。実現までにはまだまだ幾多の困難があるが、粘り強く取り組むとともに、研究対象としてきたプラズマの産業応用 (半導体製造、医療、農業など) の側面にも興味を持つようになっている。

講演会後には同会場でプラズマ・科学実験を行い、講演会で話題に出たプラズマや科学を参加者に身近に感じていただきました。実験の時間を会議の事前登録の時間帯と重ねたため、会議参加者の飛び込み観覧があり、国際色豊かなイベントとなりました。

国際会議のメインテーマであるプラズマを活用した現代のSDGsへの貢献に関して市民の皆さんと共有し、ともに考える講演を通じて、青森におけるSDGs意識の高揚も図ることができたと考えています。

開会式は180名収容できるイベントホールがほぼ満席となる盛況。ポスターセッション会場で開催した「Meet the Aomori」共同研究マッチングイベントでは、研究者間で活発に情報交換が行われた。





### 三内丸山遺跡では 仕事を離れた 参加者同士の交流も

国際会議参加者のネットワーキングや個別議論の場として、三内丸山遺跡を訪問し、現地では、遺跡の見学のほか海外居住者を対象に勾玉の制作体験も行いました。隣席の方同士が会話を楽しむ様子も見られ、研究から離れた場所でゆったりとした雰囲気の中で交流を深める機会となったようです。作成した勾玉は唯一無二のお土産としてお持ち帰りいただきました。見学時には各国語対応の既存のパフレットのほか、ITガイド(タブレット:英語、中国語、台湾語、韓国語、タイ語対応)を借り上げて、希望者に使ってもらえるように準備しました。また、英語が話せる会議通訳の方(国際会議で手配した通訳の方)が、参加者に積極的に声をかけ、遺跡の説明も含めて場の雰囲気を和らげてくださいました。

今回は晴天に恵まれましたが、よほどの荒天でなければ遺跡スペースを見学してもらうことも可能で、館内にもミュージアムや縄文食体験ができるレストランなどを備えており、天候に関わらず柔軟に対応できると判断し、訪問を決定しました。



三内丸山遺跡の見学やバンケット、コーヒーブレイクなどで参加者同士の交流が盛んに行われた。大人気だったリンゴジュースや日本酒、リンゴを使ったお菓子など青森ならではの食を存分に味わってもらった。提供したお菓子のパッケージ展示の効果で、お土産の購買意欲も高まったようだった。

### バンケットでは 五感で青森を感じられる 多様なコンテンツを用意

国際会議の会場となった「ねぶたの家ワ・ラッセ」は、ねぶた文化を発信する施設として、施設内にねぶた展示やお囃子館内放送などを備えています。180名まで収容できるイベントホールのほか、講演などで利用できる部屋も複数あり、会議から懇親会・イベントまでを1か所で開催できるのは、この会場の強みと言えると思います。青森駅に非常に近いうえ、徒歩圏内にホテルもたくさんあり、海外からの参加者が多い国際会議には最適な環境でした。

バンケットで提供する料理は地産地消にこだわり、青森の魚介類や郷土料理、名産のリンゴを使ったデザート、地酒などを用意しました。料理名を英語で記載する工夫も行いました。地酒は各種取り揃えて飲み比べもできるようにし、人だかりができるなど大変人気を集めました。

バンケット開始から1時間程度の少し落ち着いた時間帯に、ねぶたミュージアムへの隠し扉を開放してねぶた屋台が目飛び込んでくるという演出を行い、意外性も相まって大きな歓声が上がると、大変盛り上がりしました。津軽三味線やね

ぶた囃子の実演も行い、ねぶた囃子体験では、跳ね方のレクチャーもあり、多くの参加者が楽しそうに跳ねていました。これまで多くのバンケットに参加したが、今回が一番だったという嬉しい声も多数ありました。五感を通して青森を感じていただく「Feel and Enjoy AOMORI Banquet」を具現化できたと思います。

### コーヒーブレイクでは ジュースやお菓子が大人気 お土産購入促進にも

会期中計4回のコーヒーブレイクでは、リンゴジュースや複数種の青森ならではのお菓子類(リンゴを使った各種スイーツ、南部せんべいなど)を毎回異なる内容で提供しました。その際、お菓子メーカー作成のポップ(多言語記載)やお土産店で売っている状態(箱や袋などの包装)もディスプレイすることで、お土産としての購入意欲喚起や、お土産店での選びやすさに直結するように工夫しました。また、ナイトセッション開催に備えて提供したライトミールにおいては、日本のおにぎり文化を発信しました。パッケージの開け方で参加者間のコミュニケーションが促進されていました。青森の名物料理「十和田バラ焼き」入りのおにぎりやハラル対応も兼ねた塩おにぎりなどを提供し、併せて提供したペットボトルの水には青森県の世界遺産・白神山地の水を選定するなど、さまざまな面から青森を紹介しました。

ピッチャーの補充が追いつかないほど好評であったリンゴジュースをはじめ、お菓子などもお土産で買ったという声が多く寄せられ、経済効果としての貢献もできたと思われま

3

### 得られた成果と課題、今後のビジョン

#### ユニークベニューとしての 三内丸山遺跡の活用には 運用上の課題も

本実証事業によって、青森の魅力をふんだんに盛り込んだ形態で国際会議を開催することができました。研究関連の国際会議では、テクニカルツアーとして、研究内容に近い「テクニカルな」訪問先に行くことが通例ですが、ユニークベニ

ューの活用という本実証事業ならではの観点からプログラムを編成することができたため、国内外からの参加者にとって「記憶に残る」会議を実施することができたと思っています。

三内丸山遺跡については、本事業での訪問ということではなく、多国籍の団体の一般訪問として受け入れていただきました。このような多国籍の団体での利用実績があまりなかったことや県の施設であって観光施設ではないこともあり、臨機応変な対応をお願いすることが難しい部分がありました。団体受け入れやITガイドタブレットの貸し出し、勾玉制作体験など、申し込み先が多岐にわたり、初めてのことであり苦労しました。今後、ユニークベニューとして活用する場合には、一元化された窓口があると、よりスムーズに進めることができるのではないかと思います。

### 今回の成功を受け 来年の国際会議開催も決定 さらなる好循環を目指す

ポスターセッション会場で開催した「Meet the AOMORI」共同研究マッ

チングイベントでは、青森県産業技術センターと名古屋大学低温プラズマ科学研究センター、核融合科学研究所とのプラズマをキーワードとした情報交換など、開催地の多様なステークホルダーとの連携・参加促進を行うことができました。また、市民講演会後に開催したプラズマ・科学実験が契機となって、青森県庁経由で青森県発明クラブとの接点も創ることができ、今後につながる関係を築くことができました。

開催実行委員会の主な母体となった名古屋大学低温プラズマ科学研究センター(名古屋六ヶ所村)と青森市所在の青森観光コンベンション協会との具体的な連携、さらに青森市の旅行代理店やイベント設営業者を通じ、円滑に開催することができました。

また、今回の参加者が関与する学会の主催で2025年に青森市で国際会議を開催したいとの提案が当該学会理事会で承認されました。すでに次の新たな誘致を生み出した今回の実証事業で蓄積したノウハウを大いに活用し、さらなる好循環につなげていきたいと考えています。

### 取材対象者②

#### 今回の経験を生かし MICEでの活用に取り組む

関 一生さん  
公益社団法人  
青森観光  
コンベンション協会  
企画事業部 次長



二十数年前に人事交流で派遣されたことがきっかけに、青森観光コンベンション協会に所属。管理先であるねぶたの家ワ・ラッセにも勤務し、観光施設の管理・運営面だけではなく郷土の文化を楽しんでいただけるよう努めてまいりました。

「ねぶたの家ワ・ラッセ」は当協会が管理しているのですが、今回のような大規模な国際会議を当館で開催したのは初めての経験でした。実行委員会は多国籍の方をお招きするノウハウをお持ちでしたので、委員会の皆様の力があって今回このようにスムーズに進めることができたと感じています。今回の経験を生かして、国際会議に限らずさまざまなMICEにおいて当館をご利用いただけるよう、各方面へPRしながら取り組んでいきたいと考えています。



迫力満点のねぶた屋台に囲まれた会場で、鳴海正仁一門による津軽三味線演奏、青森ねぶた凱立会によるねぶた囃子・跳人体験が行われ、大いに盛り上がった。青森の文化を体感してもらった機会となり、参加者にも大好評を博した。

## UV17

名古屋 × 徳川美術館

尾張徳川家ゆかりの美術館で  
本物のサムライ文化に触れる

認知記憶応用研究会 第14回定期総会

The XIV Biennial Convention of the Society for Applied Research in Memory and Cognition: SARMAC 2023

2023年8月9日から4日間にわたり名古屋にて開催された「認知記憶応用研究会第14回定期総会」。2度目の日本開催となった今回、最終日前夜に、徳川家ゆかりの品々を所蔵する観光名所「徳川美術館」をユニークベニューとしたバンケットを実施した。前評判も上々で、参加枠は即日完売。82名の参加者のうち、79名は外国籍であった。当日は提灯やライティングによる空間演出でナイトミュージアムならではの特別感を醸成。バンケットのアトラクション/アクティビティとして、芸者による日本舞踊のパフォーマンスや折り紙体験も提供した。参加者からは、「本物のサムライ文化を体験することができた」と、高評価を得た。

## DATA

会議名称  
認知記憶応用研究会第14回定期総会  
主催者  
SARMAC Nagoya 組織委員会  
コンベンションビューロー  
公益財団法人  
名古屋観光コンベンションビューロー  
会議会期  
2023/8/9-8/12  
会議会場名  
ホテル名古屋ガーデンパレス  
実証プログラム会場名  
徳川美術館  
実証プログラム参加者数  
国内からの参加者3名  
国外居住者79名  
実証プログラム実施一人当たり金額  
46,017円



尾張徳川家の邸宅の遺構、黒門。この奥に今回会場となった徳川美術館がある

## SCHEDULE

SARMAC2023 徳川園・徳川美術館 ユニークベニューバンケット	
15:00	ケータリング搬入
16:00	SARMAC会議終了
17:00	徳川園到着 徳川園 庭園鑑賞
18:00	徳川美術館 エントランスでの ウェルカムレセプション
19:00	展示物見学立食ビュッフェ歓談 ・19:30-19:45 名技連3名パフォーマンス ・19:00- 20:00 ワークショップオープン (折り紙で兜を折ろう)
20:00	クロージング・徳川美術館出発
21:00	ホテルガーデンパレス近くの 停車場到着
22:00	ケータリング完全撤収

## 1

## UV選定の経緯

サムライ文化を肌で感じられる  
稀有な施設

名古屋観光コンベンションビューローは「サムライ文化」と「産業の集積地」という2つの特徴をキャラクター化して、名古屋エリアのプロモーションを行っています。市内および周辺エリアに数ある観光スポットの中でも、尾張徳川家ゆかりの大名道具を数多く所蔵する徳川美術館は、「サムライ文化」を強く打ち出せる、重要な施設のひとつです。

徳川美術館は「徳川園」という大名庭園に隣接していることもあり、武家文化を肌で感じられるという特徴もあります。今回のようなインバウンド向けのユニークベニューとして大変魅力的で、インパクトもあると考えました。また、街中であって会議場からのアクセスがよいこと

学会の会場は名古屋ガーデンパレス。前回(2021年開催)は新型コロナの影響でオンライン開催だったため、4年ぶりに対面での開催となった。



に加え、今回は利用しませんでした。100人ほどのバンケット開催が可能ならレストランを併設しているのも強みです。そして何より、施設側がユニークベニューとしての展開に前向きで、意欲的に取り組む姿勢を持っていたことが、徳川美術館でのバンケット開催の追い風になったと思います。

## 2

## 実施内容・運営について

本来の目的とは異なる  
使い方をするだけに  
入念な準備が必要

今回は施設側が大変協力的で、準備段階から、すべてがスムーズに運んだ印象です。ただ美術館という、本来食事をすることを想定していない施設での、ましてや通常営業後の開催だったため、当日のスケジュールに配慮する必要があ



## 取材対象者①

## 古橋理江さん

名古屋観光  
コンベンション  
ビューロー  
MICE部  
MICEグループ



2017年に(公財)名古屋観光コンベンションビューローに入所。以来7年間MICE部にて、MICE主催者様、ご参加者様の「名古屋で開催してよかった」「参加してよかった」とのお声を糧に、会議誘致、インセンティブ誘致に取り組んでいます。

りました。また、真夏の開催だったため、食品の安全性についても神経を使いました。トラブルが発生しないよう、事前にケータリングの搬入・搬出経路や電源の場所等を確認するほか、当日の段取りについて綿密な打ち合わせを重ねました。「徳川フェスタ」と銘打たれた今回のバ



海外から多くの参加者が集う国際会議は、日本および当地域の文化を味わってもらおう絶好の機会。会議中のスナックもおにぎりなど、日本の味を提供。

ンケットへは82名が参加。ローカルホストであるSARMAC Nagoya組織委員の2名と招待講演者の1名以外は、海外からの参加者が占めました。当日は全員が揃いの法被を着てバスに乗り込み、ホテルから会場へと向かいました。この法被は、今回の世話役であるSARMAC Nagoya組織委員・守一雄先生のアイデアだったのですが、参加者同士の一体感を醸成するとともに、参加者の識別にも

参加者は葵の紋が入った揃いの法被を着て会場へ。大名庭園・徳川園を散策した後、徳川美術館に入館した。美術館では、ウェルカムドリンクの後、徳川家ゆかりの展示物を英語のガイド付きで鑑賞。その後、ビュッフェスタイルのバンケットを楽しんだ。



役立ちました。バスでの移動時間を利用して、徳川美術館の概要、展示テーマである武家文化、徳川家と名古屋との関係性などをレクチャー。事前に説明を受けたことで参加者の興味がさらに深まり、展示品鑑賞へのモチベーションも高まったようです。

### この地に根付いた 大名文化をリアルに体感

ナイトミュージアムならではの空間演出にもこだわりました。エントランスに提灯をともしたり、葵紋をモチーフとし



たライティングを行ったり、展示室へ誘導する際もライティングや音楽、アナウンスなどを工夫して特別感を演出。会場に到着した参加者は、まずはウェルカムドリンクの提供を受け、その後、展示室へと案内されました。こうしたドラマティックな演出は、通常の美術館訪問では味わえませんし、展示への期待感をさらに高めることになったはず。

展示室では、徳川家ゆかりの品々を英語のガイド付きで鑑賞していただきました。刀や甲冑から、能や茶道に関する道具類、襖絵まで、多岐にわたる展示品を間近に見ることで、この地に根付いた武家文化をリアルに体感しながら、武家文化への総合的な理解を深めていただけたと思います。

### 多様性に配慮した料理と 武家文化と親和性のある アトラクションを用意

バンケットはビュッフェスタイルとし、中庭を臨む開放的な空間で食事を楽しんでいただきました。サステナビリティの観点から、地元の食材を多用した料理と地酒を中心にメニューを構成し、それぞれの料理について、英語で内容を表示しました。今回はベジタリアンおよびビーガンの方が13名いらっしゃったのですが、事前の聞き取りでビーガンメニューを希望した人数がわかっていたので、適切な量を確保することができました。また、今回は車椅子をご利用の方と目の不自由な方も1名ずつ参加されており、多様性への配慮が求められましたが、守先生が個別にコンタクトを取ってくださったので、落ち着いて対応することができました。

バンケットのアトラクションとしては、武家文化と時代的に親和性の高い日本舞踊を選び、芸者さんに踊ってもらいました。ここでも英語の説明を交えることで、「芸どころ」の呼び声が高い名古屋の土地柄をアピール。また、ご家族連れの参加者に向けて折り紙のワークショップを行い、70cm角の折り紙を用意して実際にかぶれるサイズの兜を折ってもらいました。当初はお子様の参加を想定していたのですが、大人の参加も多く、日本らしさを感じるアクティビティを通して武家文化の一端を体験できたと好評でした。



3

### 得られた成果と課題、今後のビジョン

#### ステークホルダーの 経験値を上げ、 「できる」ことを実証

徳川美術館でのバンケットの開催は、名古屋のアイデンティティのひとつである武家文化を海外に向けてアピールする、理想的な機会となりました。私たちを含め、今回携わったすべての地元ステークホルダーの経験値を上げてくれましたし、ホテルやレストラン以外でもバンケットの開催が可能であると実証できたことが、何よりの成果だったといえるでしょう。参加者にとっては、時間的な制限があるなか、学会で訪れた地域の特性に触れる貴重な機会であり、名古屋を訪れたことをより強く印象づけるファクターになったと思います。

今回のバンケット開催においては、名古屋への学会招致の立役者であるSARMAC Nagoya組織委員の守一雄先生に助けられました。ビーガンの人数把



バンケットのアトラクションとして、芸者が日舞を披露。「芸どころ名古屋」と呼ばれる土地の伝統・文化を紹介した。子ども連れの参加者に配慮し、折り紙のワークショップも開催。実際にかぶれるサイズの兜を折り、好評を博した。

握や、ハンディキャップを持つ方々へのヒアリングと訪問先の受け入れ態勢の確認、料理の説明の英訳等を引き受けてくださったほか、当日は折り紙の講師も務めてくださいました。また、事前に日本の刀文化に関連する英文記事を発掘して、全参加者に共有したとのこと。こうした参加者の知的好奇心を刺激する情報発信は見習いたいと思います。

今後に向けて改善すべき点としては、ウェルカムドリンクの提供に時間がかかりすぎたこと、タクシー利用でバスより先に到着された車椅子の方を外で待たせてしまったことなどが挙げられます。今回の経験を踏まえ、こうした現場のオペレーションを改善していきたいと思えます。ハンディキャップを持つ方への対応については、ケースバイケースということが多く、一律にマニュアル化することはできませんが、今後、事例共有を重ねて解決策を見つけていく所存です。

### 取材対象者②

#### 学会が熱望した 日本での再開催を実現

守一雄さん  
東京農工大学  
名誉教授



信州大学、東京農工大学、松本大学に計40年間勤務し、2022年に定年退職。現在は専業主夫のかたわら在宅で認知心理学や教育心理学の研究を継続中。

SARMACの定期大会は2年に1度開催されるのですが、英語圏での開催が慣例となっていました。しかし、認知や記憶の研究は英語圏に限るべきものではなく、非英語圏での定期大会の開催を模索し、2009年に非英語圏としては初となる、京都での開催に漕ぎつきました。それが大変好評で、2021年も再度日本での開催が決まっていたのですが、新型コロナウイルス感染症の影響で延期となり、今回4年ぶりに、ようやく対面での会議を再開することができました。

徳川美術館でのバンケットは、学会の最終日前夜に急遽追加するかたちで開催することになり、参加希望者を募ったところ、即日完売し、「キャンセルが出たら教えてほしい」との声も多く寄せられました。それだけ「サムライ文化」への注目度が高かったというわけです。実際参加した方からは「素晴らしかった」との感想が寄せられています。「日本で開催する」というだけで、外国の方には十分に魅力的であるところに、徳川美術館でのバンケットという特別な企画を付け加えたことで、名古屋という街の印象がより鮮明に、参加者の記憶に残ったのではないのでしょうか。

## EX25

広島 × 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館 ほか

# 児童・生徒・学生との交流を交え 平和都市広島の軌跡をたどる

第13回アジア比較教育学会 (CESA2023)

広島国際会議場で2023年11月24日から11月26日まで開催された第13回アジア比較教育学会は、アジア最大の比較教育学分野の研究集会。コロナ禍以降初めての対面開催で、アジア、アフリカをはじめとする世界各地から研究者が集まった。そうした教育の専門家に訴えかけるプログラムとすることを意識し、「平和」を切り口とした、広島ならではのエクスカージョンを2日間にわたって実施。悲惨な被爆体験と平和的な要素を組み合わせ、3つのプランを用意した。それぞれにおいて、広島の過去を避けることなく伝えるとともに、前を向いて進む広島をアピール。小学生・高校生・大学生との交流の機会も設け、好評を博した。

## DATA

会議名称  
第13回アジア比較教育学会 (CESA2023)  
主催者  
第13回アジア比較教育学会準備委員会  
コンベンションビューロー  
公益財団法人  
広島観光コンベンションビューロー  
会議会期  
2023/11/24~11/26  
会議会場名  
広島国際会議場  
実証プログラム会場名  
国立広島原爆死没者追悼平和祈念館、  
おりづるタワーほか  
実証プログラム参加者数  
国内からの参加者85名  
国外居住者165名  
実証プログラム実施一人当たり金額  
7,625円



悲惨な被爆体験から  
見事な復興を果たし  
た平和都市広島。

## SCHEDULE

	Day1 11/26 (日) 平和/ 広島の今を実感し未来へ	Day2-A 11/27 (月) 広島市本川小学校訪問と 宮島観光/広島大学を中心 とするボランティアと共に	Day2-B 11/27 (月) 被爆体験講話と宮島観光 /広島大学を中心とする ボランティアと共に
9:00		集合 出発	集合
9:30		小学校との交流 @広島市本川小学校	茶道等体験 @JMSアステールプラザ
11:00			小倉桂子さん被爆体験講話 @広島平和記念資料館地下研修室
12:00		昼食	昼食
14:00	広島大学震キャンパス 被爆体験記・原爆の詩の朗読/ ビデオ鑑賞/感想発表	原爆ドーム前棧橋 広島 大学関係者を中心に青年 ボランティアと共に観光	原爆ドーム前棧橋 広島 大学関係者を中心に青年 ボランティアと共に観光
15:00	折鶴体験	世界遺産航路で宮島港へ 島内観光 (厳島神社・紅葉谷公園・ もみじ饅頭) フリー	世界遺産航路で宮島港へ 島内観光 (厳島神社・紅葉谷公園・ もみじ饅頭) フリー
16:00			
18:00	ショッピング/フリー/ 各自夕食	宮島 原爆ドーム前棧橋(解散)	宮島 原爆ドーム前棧橋(解散)
19:30	広島駅		

## 1

## 選定の経緯

## 平和を切り口とした 広島ならではのプランに

2日間にわたり実施したエクスカージョンの1日目は、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の協力による被爆体験記と原爆詩の朗読会と「おりづるタワー」訪問をセットにしたプランAを実施。2日目の午前はB-1・B-2、2つのプランを設定し、B-1は校内に平和資料館を持つ広島市立本川小学校を訪問。B-2は「日本文化体験」として茶道を体験した後、広島平和記念資料館にて被爆体験講話を聴きました。午後はB-1・B-2共通のプログラムとして、宮島観光を行いました。

3つのプランの中でもプランB-1が今回の目玉となりました。教育者にとって



は、指導の現場を見たり、子どもたちと触れ合ったりすることが一番の魅力と考え、最初に小学校訪問をプラン化することに決めましたが、受け入れ人数は40名が上限と判明。当初は100名を想定していたので、急遽プランB-2を作ることとなりました。3プランとも、被爆体験に触れる内容ですが、それぞれに平和の要素を加え、つらいだけではない、「これから前に進むための平和」というニュアンスを持たせました。

## 2

## 実施内容・運営について

## 児童・生徒・学生との 交流の機会も提供

プランAの体験記・原爆詩の朗読は、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の既

## 取材対象者①

## 千野行博さん

公益財団法人  
広島観光  
コンベンション  
ビューロー 主幹



1997年採用。主にコンベンションの各分野(医学系、医学を除く大学の学部、学校教育、一般団体)の国際・国内会議およびインセンティブ旅行の誘致・支援および見本市・展示会の誘致にも従事してきた。昨年4月より、コンベンションの誘致・支援担当となり、主催者へのサポートを行っている。

存のプログラムを利用したもので、コンパクトにまとまっているのが魅力です。祈念館が作る冊子には6編の体験記と11の原爆詩が載っており、家族など、身近な人について書かれています。短い中



当学会は世界各国の教育制度や特徴、教育課題、あるいは全アジアおよびグローバルな教育に関する学術的知見をアップデートすることを目的に開催された。会期中2日間にわたり実施されたエクスカージョンでは、平和プログラムを提供。3プランそれぞれにおいて広島の被爆体験とその後の復興について言及した。





に作者の心の片鱗がうかがえ、それが読み手の心にすんと落ちます。今回の参加者にも、その感覚を味わってほしいと思いました。

当日、アジアからの訪日参加者の中から「全員で詩を一段落ずつ読もう」との提案があり、一人ずつ、次々と読むことになりました。この詩の朗読会には、広島県内の高校生も参加しましたが、海外からの参加者と気持ちを一つにして詩を読んでいたようです。

詩の朗読の後は、つらい気持ちのまま終わってしまわないように、平和公園のすぐそばにあるおりづるタワーを訪れました。おりづるタワーでは、平和を祈りながら折り鶴を折り、折り鶴が積み重なった「おりづるの壁」へ投入することが

「おりづるタワー」では、参加者は実際に折り紙に挑戦。折った鶴をおりづるタワー内の「おりづるの壁」に投入し、平和への想いや祈りを積み重ねた。



できるほか、間近に広島を一望することができます。参加者は、原爆で破壊された街がこんなにもきれいな街へと生まれ変わったことを実感でき、前向きな気持ちになれたと思います。

プランB-1の小学校訪問では、小学3・4年生の案内で、校内に併設の被爆に関する資料館を見学しました。その際、40人の参加者は8つの班に分かれ、各班に通訳が同伴しました。子どもたちは見知らぬ大人に囲まれても尻込みすることなく、元気いっぱいに案内してくれました。被爆という暗い話を聞いたわけですが、子どもたちからパワーをもらって前を向き、広島が原爆の被害から立ち上がった歴史に思いを馳せたと思います。

プランB-2の被爆体験講話については、

プランB-1では、原爆資料館を有する広島市立本川小学校を訪問。参加者は8つのグループに分かれ、小学3・4年の児童の案内で資料館を見学した。



「おりづるタワー」を訪問したプランAの参加者は、被爆から現在にいたる過程をデジタルで視聴した後、屋上から再建された広島をながめ、それぞれに復興した広島に思いをはせた。

今回は幸運にも、広島G7サミットで話をされた小倉桂子さんをブッキングできました。通常は通訳を入れることが多いのですが、小倉さんは英語を話せます。直接本人の言葉をもって話を聞いたことは、参加者にとって貴重な体験となったでしょう。

プランB-1・B-2共通の宮島観光には平和公園原爆ドーム前から宮島を直接つなぐ世界遺産航路を利用しました。移動時間が一般的なルートの半分に短縮できますし、チャーター便なので、船の中でマイクを使うことができるのも大きな魅力でした。今回は通訳ガイドが帰りの集合時間などの注意事項を伝えることができました。

### 事前の入念な準備でボランティアを楽しく

プランBでは、学生ボランティアの活躍が目立ちました。ローカルホストである広島大学の日下部達哉教授のお声かけで、留学生を含む大学生等18名が参加しました。現場では、通訳ガイドのサポートに入るほか、宮島島内にある商店街のお店や高速船乗り場への誘導、買い物のサポートなど、仕事は多岐にわたりました。

事前にマニュアルを作成し、それぞれの役割を決め、細かく仕事を割り振って、当日に挑みました。今回は通訳ガイドが主体的に学生と関わり、具体的な指示を出してくださいました。ガイドに対して「一緒に楽しみましょう」という基本コンセプトを体現くださいました。ボランティア



プランB-2では、日本文化体験として茶道を体験。英語で説明を受け、参加者自らもお茶をたてた。

にはお揃いの赤いバンダナを着けてもらい、参加者には「何か聞きたいことがあったら赤いバンダナの人に声をかけて」と伝えていたので、安心して観光を楽しめたと思います。

### 店側と参加者をWin-Winの関係に

今回、ランチはアステールプラザ近隣のレストランを利用しました。大人数対応の個室を昼食会場にするのではなく、6軒のレストランに分けて、人数分のテーブルを予約しました。提供する料理もあらかじめ決めておき、対応しやすくしました。ベジタリアンやハラールに関しては、日下部教授のご尽力により事前に人数を把握することができ、豆腐専門店をベジタリアン等の拠点として設定しました。さまざまなバリエーションがある中、一番人気はお好み焼きで、席の争奪戦がありました。各レストランへは、通訳ガイドとボランティアが連携して誘導したのですが、まず、バスでの移動中に当日のランチメニューを見せて、何を食べるかを決めてもらいました。ボランティアスタッフには、あらかじめ担当するレストランを割り当て、店までの案内係としました。

プランB-1・B-2共通で、午後は宮島観光を行った。通訳ガイドおよび学生ボランティアのホスピタリティが高く評価された。



このやり方だと値段の高いケータリングを利用する必要がない上、参加者とレストラン、双方にメリットがあります。今後の国際会議においても、新しい昼食のスタイルとして、提案できるのではないかと考えています。

3

### 得られた成果と課題、今後のビジョン

#### 生徒・学生との交流および学校訪問に確かな手応え

今回実施した3つのプランは、それぞれにおいて広島の過去を避けることなく伝え、そして前を向いて進む広島を実際に見てもらいました。加えて、プランAでは高校生、プランB-1では小学生、プランB-1・B-2共通のプログラムでは大学生との交流の機会を提供できました。教育学の研究者にとっては驚きのプログラムになったと思いますし、学生ボランティアからは「また声をかけてほしい」との声が多く上がりました。

今回、大変好評だった小学校訪問に関しては、校長先生からも「やってよかった」と言ってくれましたが、反省点もあります。小学校にとって、2時間半の対応は長すぎたと感じており、児童の負担を減らすためにも、次回からは時間を短縮することを協議していきたいと思っています。別の小学校での実施も検討したいところですが、今回のようなエクスカージョンでは、校内に被爆物があることが条件となります。また、小学校は年度初めに年間の予定が確定するため、スケジュール調整が難しい。今後は「できるかどうか」の確認を含め、早めのアプローチが必要と考えています。

#### 取材対象者②

#### 現地に人を呼び込み消費を促すことが大事

日下部達哉さん  
広島大学  
教育開発国際協力  
研究センター  
副センター長 教授



2007年、九州大学大学院人間環境学府より博士(教育学)を授与、日本学術振興会特別研究員PD(京都大学)、早稲田大学イスラーム地域研究機構を経て、2010年より現センターに所属、現在に至る。

今回、エクスカージョンの実施にあたり、条件に見合った会場を確保することの重要性を再認識しました。主催者として、「部屋を押さえたはいいが、それだけの人が集まるのか」という不安を抱えながら準備していました。

今回もうひとつの懸念は、コロナ明け初めての開催だったということでした。潜在的に移動したい、という気持ちが高まってはいても、オンラインでもできるということを、皆さん知っています。実際、「オンラインでやってもらえないの?」という問い合わせもありました。それでもやはり、来てもらって、現地を楽しみ、同時に消費してもらうことが大事でしょう。

今回は想定に近い数の会議参加希望者が集まり、広報の重要性を痛感したとともに、分母母数(会議参加希望者数)が大きくなれば、分子(エクスカージョンの参加者数)も確実に増えることがわかりました。参加者をどのように増やすかが、今後の考えるべき課題だと思います。



## EX16

岐阜 × 法東山・極楽寺ほか

多様性溢れるエクスカージョン・プログラムで  
地方都市の魅力をアピール

焼結国際会議2023

2023年8月27日から31日にかけて、長良川国際会議場にて開催された「焼結国際会議2023」。会期中の8月30日(水)に、3コースのエクスカージョンを実施した。会期中は観光インフォメーションブースを設置・運営し、エクスカージョンのほか、ナイトタイムエコノミーとして訴求できるプログラムも紹介した。各コースのプログラム設定においては、全体のバリエーションを意識しながら、日本の地方都市ならではの豊富な自然・歴史・文化・食といった魅力をアピール。多彩なバックグラウンドを持つ参加者に向けた、岐阜ならではの destinations・ブランディングを生かした企画は、今後の国際会議開催への汎用的な展開を期待させるものとなった。

## DATA

会議名称  
The International Conference on Sintering 2023  
焼結国際会議2023  
主催者  
公益社団法人 日本セラミック協会  
エンジニアリングセラミック部会  
コンベンションビューロー  
公益財団法人 岐阜観光コンベンション協会  
会議会期  
2023/8/27-8/31  
会議会場名  
長良川国際会議場  
実証プログラム会場名  
達磨正宗酒蔵、美濃小坂酒造、  
美濃うだつの上がる町並み・関鍛冶伝承館、  
法東山・極楽寺  
実証プログラム参加者数  
国内からの参加者150名  
国外居住者100名  
実証プログラム実施一人当たり金額  
3,944円



極楽寺での日本のおもてなし文化体験終了後、参加者全員で記念撮影。

## SCHEDULE

	エクスカージョン① 大自然探訪 「伊吹山ドライブウェイ& ハイキング」	エクスカージョン② 日本の伝統&歴史探訪 「酒蔵&伝統的町並み& 刀剣の技」	エクスカージョン③ 日本のおもてなし 文化体験 「法東山・極楽寺」
10:00	長良川国際会議場 集合	長良川国際会議場 集合	長良川国際会議場 集合
11:00		カンファレンス撮影 @長良川国際会議場	
12:00	バス移動	バス移動 古酒の酒造・ 達磨正宗酒蔵	バス移動
13:00	〈伊吹山ドライブウェイ〉	移動 美濃小坂酒造 うだつの上がる町並み	法東山・極楽寺 (茶道体験・折り紙作り・ 書道体験)
14:00	伊吹山(山頂)	移動 関鍛冶伝承館	
15:00	【伊吹山ハイキング】	移動	岐阜大仏(正法寺)
16:00	バス移動		
17:00	長良川国際会議場 着	長良川国際会議場 着	長良川国際会議場 着
18:00			
19:00	適宜解散、宴会へ @都ホテル 岐阜長良川	適宜解散、宴会へ @都ホテル 岐阜長良川	適宜解散、宴会へ @都ホテル 岐阜長良川

## 1

## 選定の経緯

初めての日本開催に  
ふさわしい内容に

コロナ禍による2度の開催延期を経て、前回から7年ぶりに、ようやく岐阜での国際学会開催が実現しました。日本での開催自体が初めてということで、海外からの参加者に向けたエクスカージョンは、極力日本らしい、豊かな自然、歴史、文化にこだわった内容にしようと考えました。8月の実施に向けて、企画を立て始めたのが3月頃。ローカルホストである岐阜大学工学部の吉田道之先生とも入念なる事前打ち合わせを重ね、最終的に①日本の大自然探訪、②日本の伝統&歴史探訪、③日本のおもてなし文化体験の3コースを設けることとしました。



## 2

## 実施内容・運営について

日本ならではの  
豊かな自然・歴史・文化を  
体感できるコース設定

①日本の大自然探訪「伊吹山ドライブウェイ&ハイキング」コースでは、日本百名山のひとつである滋賀県最高峰・伊吹山の9合目付近までバスで登り、その後、高山植物が咲き誇る山頂付近を散策。西は琵琶湖、南は鈴鹿連峰までを見渡せる、360度のパノラマビューを、雲上から楽しみました。

②日本の伝統&歴史探訪「酒蔵&伝統的町並み&刀剣の技」コースでは、岐阜市および美濃市の酒蔵を訪問。日本酒造りのプロセスを見学し、醸造と発酵の技術を学びました。その後、江戸時代と明

## 取材対象者

## 川上千尋さん

公益財団法人  
岐阜観光  
コンベンション協会  
コンベンション  
推進部長



JTBツーリズム事業本部より出向中。過去にはジェイティビー旅行事業本部 観光戦略室(沖縄事業推進プロジェクト)、福井県観光連盟(観光プロデューサー)、JTB名古屋事業部(中部広域交流事業担当)のミッションを通じて、地域交流ビジネスに携わる。

治時代の商家が残る国の伝統的建造物群保存地区「美濃うだつの上がる町並み」を散策。関市の「関鍛冶伝承館」にも足を延ばし、700年の歴史を誇る刀鍛冶の技、古式日本刀鍛錬のライブデモン



本学会には欧米、アジア、中国、アフリカ等20か国以上の国々から参加。リアル交流体験を楽しんだ。3コースを用意したエクスカージョンには、当会議全参加者の約75%が参加。ポストコロナにおけるインバウンド訪日観光客に対する「コト体験」コンテンツを提案し、日本の歴史・文化的奥深さの価値を体感してもらった。



トレーションを体感しました。

③日本のおもてなし文化体験「法東山・極楽寺」コースでは、400年以上前に建立された浄土宗の寺院・極楽寺にて、茶道、書道、折り紙等、多様な文化体験を提供。参加者は10名ずつ、3つのグループに分かれ、各体験メニューをローテーションしながら、満遍なく楽しみました。その後、日本三大仏のひとつに数えられ、乾漆仏としては国内最大である岐阜大仏（正法寺）を見学しました。

今回の国際会議は、陶器や磁器の研究をされている大学教授や学芸員の方を中心に、アジアやアフリカ等、20か国以上から参加者が集まりました。エクスカーションに参加したのは178名。全学会参加者の約75%に当たります。この数字は、コロナ禍においては諦めざるを得なかった“リアルな交流体験”への渴



望感が高まっていたことの表れであると痛感するとともに、ここ岐阜において、日本の豊かな自然や歴史文化の魅力在海外のさまざまな国の方々に訴求できたという実感を持つことができました。

### 3 得られた成果と課題、今後のビジョン

#### 歴史ある寺院での多彩なおもてなし文化体験を今後のキラーコンテンツに

今回は特に、極楽寺で実施された「日本のおもてなし文化体験」の評価が高く、例えば初めての来日で参加したというアメリカ人女性からは、現地スタッフのホスピタリティが素晴らしかったとの声が寄せられました。現地の方々が非常に親切に接してくれたおかげで、茶道、書道



エクスカーションでは酒蔵巡りや町並み散策、刃物歴史文化体験、寺院でのおもてなし文化体験（呈茶・和菓子づくり見学・書道・折り紙ほか）等のプログラムを提供。参加者は非日常空間で、日本そして岐阜ならではの異文化体験を楽しんだ。おもてなし文化体験では、地元のボランティアスタッフのホスピタリティが高く評価された。

や折り紙といった体験を通じたリアルな交流を楽しめたとのこと。私どもとしても、今後の国際会議において活用できるキラーコンテンツのひとつとなり得るのではないかと、期待しています。

極楽寺は従来よりインバウンドの受け入れに積極的で、コロナ以前から書道やお茶、着物の着付け等の体験プログラムを行っていました。元々お寺の諸行事を通して形成したコミュニティがあったことから、体験プログラムをサポートするボランティアスタッフが多くいらっしゃいます。今回もご住職のネットワークを通じて、こうした方々にご協力いただいたのですが、英語を話せる方も多く、海外からの参加者と直接的かつ親密なコミュニケーションを取れたからこそ、おもてなしの気持ちが伝わったのだと思います。今回このようなエクスカーションを実施



エクスカーション② 酒蔵&歴史的町並み散策&刀剣文化体験では、関鍛冶伝承館にて古式日本刀鍛錬実演を間近に見学。ひと時、タイムスリップしたかのような感覚を味わった。

できて本当によかったと思いますし、今回の成功（実績）が、今後の受け入れにつながるひとつのレガシーとなったと感じています。国際会議以外にも、国内外から観光で訪れる富裕層やアクティブシニアに向けたエクスカーションとしても活用していけるとの実感を持ちました。

#### タマミヤエリアでの居酒屋文化体験を鵜飼に替わるコンテンツに

今回、前述のエクスカーションとは別に、ナイトタイム・エコノミー・コンテンツとして、岐阜駅前に広がる飲み屋街、タマミヤエリアでの居酒屋巡りも、会議参加者に提案しました。タマミヤエリアに



コロナ禍により7年ぶりのリアル開催となった焼結国際会議2023のバンケットには岐阜市長も出席。アトラクションとして和太鼓の演奏が会場を盛り上げ、参加者は久しぶりの相互交流を楽しんだ。

上前から続く伝統的な漁法で、鵜飼観覧を現在に続く“おもてなしの手法”として最初に取り入れたのは、織田信長だったといわれています。ただ、鵜飼は例年5月～10月まで、約5か月間の開催ということで、オフシーズンのインバウンド向けコンテンツの開発が必要でした。その点、タマミヤエリアでの飲み歩きは、オールシーズン活用できるコンテンツとして、国際会議参加者にとって十分魅力的だと思えましたし、実際、一定の経済効果があったとの報告を受けています。インバウンド向けの訴求力が高く、今後のMICE誘致のための吸引力に成り得るのではないのでしょうか。

#### 広域観光圏連携による岐阜エリアならではの魅力のさらなる磨き上げ

今後の目標としては、自治体の枠を超えた広域観光圏連携の強化が挙げられます。国際会議開催においては、より多彩で満足度の高いエクスカーションが求められると思いますが、私ども岐阜観光コンベンション協会だけでそれを推進していくのは限界があります。今後はより多くのステークホルダーにご協力いただき、岐阜市だけでなく、美濃市や関市、郡上市、その他周辺地域とも連携しながら、より広域で魅力的なエクスカーションをセッティングしていきたいと思っています。開催効果を周辺地域にまで拡大することが、岐阜市での国際会議開催の魅力さをさらに高めることにもつながっていくのではないかと感じています。



## EX01

北海道 × ウポポイ／キウス周堤墓群

文化観光交流施設の活用により  
食や伝統芸能で北海道を満喫2023東アジア文化遺産保存  
国際シンポジウムin札幌

近年、北海道では2020年にウポポイ（アイヌ民族国立博物館などを有する民族共生象徴空間）が開設され、2021年には北海道・北東北の縄文遺跡群が世界遺産に登録されるなど、新しい動きがある。日本・中国・韓国の研究者が集う「2023東アジア文化遺産保存国際シンポジウムin札幌」では、文化遺産の活用と、民族と自然の共生をテーマに、ウポポイと千歳市に所在するキウス周堤墓群を巡るエクスカージョンを開催した。札幌市と白老町、千歳市の広域連携で実現したコースであり、文化遺産の保存と活用を促進しながら観光にもつなげる新しい取り組みを各国研究者に示した。



ウポポイのPRキャラクター「トゥレポん」がお出迎え。

## SCHEDULE

	A班 バス3台：約120人 エクスカージョン行程（中国語対応）	B班 バス3台：約120人 エクスカージョン行程（中国語・韓国語対応）
7:00	受付開始	
8:00	バス移動	受付開始 バス移動
9:00	キウスに到着、見学 ※雨天時はバスから見学	
10:00	移動（美沢PAトイレ休憩 10:30-10:40）	キウスに到着、見学 ※雨天時はバスから見学
11:00	かに御殿昼食	移動（美沢PAトイレ休憩 10:30-10:40）
12:00	移動	かに御殿昼食
13:00	ウポポイ到着・園内に移動	移動
14:00	博物館・公園自由見学 （推奨：体験交流ホール13:30-14:00）	ウポポイ到着・園内に移動
15:00	ウポポイ駐車場集合、出発	博物館・公園自由見学 （推奨：体験交流ホール14:30-15:00）
16:00		ウポポイ駐車場集合、出発

## DATA

会議名称  
2023東アジア文化遺産保存  
国際シンポジウムin札幌  
主催者  
東アジア文化遺産保存学会  
コンベンションビューロー  
公益財団法人  
札幌国際プラザ・コンベンションビューロー  
会議会期  
2023/8/10-13  
会議会場名  
北海道大学 学術交流会館  
実証プログラム会場名  
キウス周堤墓群  
ウポポイ・国立アイヌ民族博物館  
実証プログラム参加者数  
国内からの参加者150名  
国外居住者200名  
実証プログラム実施一人当たり金額  
8,711円

## EX選定の経緯

「ウポポイ」のオープン  
をきっかけとして  
シンポジウム誘致が進む

日本、中国、韓国を中心とした東アジアの国々が連携協力し、東アジア地域の文化財の保存方法・調査方法・修復方法・活用方法などの研究成果を共有するために設立された「東アジア文化遺産保存学会」。2007年の発足以前からシンポジウムを開催しており、第7回目となる2023年は、北海道札幌市で「2023東アジア文化遺産保存国際シンポジウムin札幌」が開催されました。

2020年にアイヌ文化の復興・創造等の拠点となるナショナルセンター「ウポポイ」内に国立アイヌ民族博物館がオープンしたことをきっかけに、シンポジウムの誘致が進み、誘致促進助成金申請などのプロセスを経て、開催決定にいたりました。その点でも、ウポポイは強い

キウス周堤墓群はバスごとにグループに分かれて見学を行った。バスの中では事前に配布された資料を熱心に読む姿も見られた。現地ではボランティアガイドの解説に熱心に耳を傾け、参加者同士の交流も活発に行われた。



ながりのある施設でした。その後、具体的なコースの選定を進める中で、2021年に北海道・北東北の縄文遺跡群が世界遺産に登録されました。この新しい動きを捉え、ウポポイと国立アイヌ民族博物館に加え、キウス周堤墓群を巡る体験コースが今回のエクスカージョンコースとして選定されました。

## 実施内容・運営について

シンポジウムのテーマ  
「文化遺産の保存と活用」に  
ふさわしい体験見学に

白老町のウポポイ（国立アイヌ民族博物館含む）は、豊かな自然に抱かれたポロト湖畔に位置する観光スポットであるだけでなく、民族の共生を象徴する空間として各国研究者からの訪問の要望が高い施設です。さらに、キウス周堤墓群は、森や海、川などの自然の恵みを持続的に利用しながら、1万年以上にわたって採集・漁労・狩猟により定住した人々の生活と精神文化を伝える文化遺産です。アイヌ文化と縄文文化に関する文化遺産

## 取材対象者①

札幌  
コンベンション  
ビューローSAPPORO  
CONVENTION  
BUREAU

2019年に東アジア文化遺産保存学会からの「札幌市コンベンション誘致促進助成金」の申請をきっかけに、札幌開催に向けた誘致を開始。その後、コロナによる2度の延期を乗り越え、2023年に念願の開催。このたびの実証事業に至る。

を訪ねて、それぞれの時代の多様な価値観を生かすこのコースは、今回のシンポジウムのテーマ「持続可能な社会の実現にむけた文化遺産の保存と活用」にふさわしい内容となったと思います。

現在のところ、札幌市内だけでは今回の学会が取り扱っているような分野に関する十分な視察先や訪問先がない状況です。そういった中で周辺地域の資源を結ぶことで、効果的に実施することができ、参加者の満足度も向上したと考えています。

SDGsの観点から見ても、文化遺産の





保全・活用には、地域住民の誇りや幸福度の向上、環境に配慮した保全活動、継続的な資金の確保など持続可能性が担保されていることが重要となってきます。本プログラムをきっかけに、文化遺産の保全・活用を意識して観光振興を進めることで、地域住民の誇りや幸福度の向上を図りながら、北海道独自の文化観光を創り出すことで、今後さらに北海道の重要なコンテンツとして発展することが期待されます。

### 実行委員が主体となって 作り上げた エクスカージョン

今回は会議の実行委員がルートを決め、当日の運営も行いました。研究者間の協力関係を得ることができ、国の機関や自治体の枠を超えた広域連携が成立したことによって、縄文文化とアイヌ文化という時空を超えた融合による新たな北海道の魅力を生み出すことができたと感じています。

移動はバスで行いましたが、中国語・韓国語と言語ごとにバスを分け、バスごとにそれぞれの言語で説明を行うことで

ウポポイは、「国立アイヌ民族博物館」のほかアイヌの伝統芸能を上演する体験交流ホールや、チセ(アイヌの伝統的な家屋)群が再現されたエリアなどがあり、さまざまな形でアイヌの文化を体験することができます。

スムーズにご案内することができました。資料もそれぞれの言語について一般的に来館者にお配りするものに加え、実行委員が独自の資料を用意しました。見学場所についての説明のほか、集合時間や集合場所なども記載して、参加者の皆様には非常にわかりやすく好評のようでした。



### 3 得られた成果と課題、今後のビジョン

#### 複数箇所の見学による 時間的・金銭的負担が 今後の課題

今回の実証により、こういった実績が残り公開されることで、今後地域が持つ資源を認識し、活用していこうと考える機会になるのではないかなと思っています。

一方で課題や懸念もあります。特にキ

ウス周堤墓群については貴重な資源を保護しながら継承していかなければならない自然遺産です。市の職員やボランティアガイドを中心に受け入れを整備されていますが、大きな観光地というわけではないので、地理的な条件としても受け入れのキャパシティはそれほど大きくありません。ですので、受け入れにあたっては人数制限や、時間制限などを設けながら、しっかりと体制を整え、慎重に進めていく必要があると考えています。

また、今回のように複数の箇所を見学する場合、やはり距離的に離れているため、時間的・金銭的負担が増えることは課題のひとつです。今回は飛行機の関係でほとんどの方が後泊することになり、宿泊できない方はルートを省略して先に空港にお送りするなどの対応を行いました。今回の実証によって、参加者の宿泊代をご支援いただけたのですが、すべて参加者の負担でなくなった場合、参加できる方が限られてしまう可能性があります。それをどう解消していくのかは課題となってくると思います。

今回のような広域連携によって、魅力あふれる複数自治体をつなぐことにより、北海道の魅力を増やして誘致力を向上させることが期待できます。環境に配慮した継続的な遺産の保全活動や観光等による資金確保を通して、持続可能性を担保しながら北海道独自の文化観光を創り出していければと考えています。

「伝統的コタン」では、伝統的な生活空間を体感できるチセの中で、コタンでの暮らしや、伝承されてきた芸能について紹介。参加者たちは再現されたアイヌの暮らしを興味深く見学していた。



### 取材対象者②

#### 参加者が自分の研究に 還元できるコース内容を選定

赤田昌倫さん  
国立アイヌ民族  
博物館研究芸部  
研究交流室 研究員



京都工芸繊維大学大学院修了後、奈良文化財研究所、九州国立博物館を経て現職に。

エクスカージョンの内容を選定するにあたり、まず、アイヌ文化復興等のナショナルセンターである民族共生象徴空間ウポポイにあるさまざまな体験型コンテンツから、アイヌ文化の復興・発展に向けた取り組みについて学んでいただきたいということが頭頭にありました。一方で、北海道にはアイヌ以外にも縄文文化をはじめとしてさまざまな文化や自然が存在します。複数の訪問地を設けることで多様性を感じていただき、訪れる人々に新たな視点を提供できると考えました。

北海道の観光といえば札幌やニセコ、ルスツといった場所が思い浮かびますが、今回は文化財を研究する東アジア諸国の方に対する観光ルートを考える必要がありました。日本の文化財は博物館や遺跡などのように保護され活用されているのを見ていただき、自国に戻りご自身の研究に少しでも還元できるような要素がある場所を選択したいという思いがあり、キウス周堤墓群をコースに選定しました。

東アジア文化遺産保存国際シンポジウムでは、各国からそれぞれの国での文化財の保存に対する基本的な考え方やそれに基づくアプローチを発表していただき、共有することができました。それを踏まえて、実際に地域の文化財が博物館や遺跡どのように保護され活用されているのを見ていただき、自国に戻りご自身の研究に生かしていただくことがシンポジウムを行うことの価値だと考えております。さらに、私の所属する国立アイヌ民族博物館にとっても、ウポポイにとっても、研究者の方々からのご意見というのは今後の発展のために役立つもので、貴重な機会をいただいたと思っています。

#### 観光として活用し 興味を持ってもらうことが 自然遺産の保全にもつながる

今回、キウス周堤墓群については一度に200人規模を受け入れるキャパシティがないため、グループ分けをして時差で見学するなどの工夫を行いました。いわゆる観光地ではなく継承していくべき自然遺産ですが、保全だけすればよいということではないと思っています。保全にもお金が必要ですから、やはり存在を知ってもらい、実際に訪れることで興味を持ってもらうことが、長い目で見て保全につながっていくと考えています。観光として活用することで、保全に賛同する人を増やすことも行っていきたくと思っています。

#### 今回の課題を生かし 今後の国際会議招聘に つなげていきたい

今回、エクスカージョンの訪問先の施設に所属している者がアテンドするという事は、合理的かつ有効であったと思います。ただ、私たちは大人数を動かすことについてはプロではないので、200人近い参加者をスムーズに案内することが大きな課題でした。また、参加者へ向けた中国語・韓国語のしおり(訪問地の解説や集合場所・時間などを記載したもの)の作成、バスの乗り遅れ防止策の検討など、ツアーを行う際に必要なことを考えるのは想像以上に大変なことでした。今後、こういった部分について、ノウハウを持つプロにご協力いただければ、私たちはもっとエクスカージョンの内容に注力できるのではないかと思います。

北海道では国際シンポジウムが多数開催されていることもあり、ウポポイやキウス周堤墓群でも多言語対応を進めてきてはいましたが、その地のステークホルダーの方々も実際に国際色のある体験をすることによって、その必要性や地元の観光資源の再認識につながったのではないかと考えています。これは今後の国際会議への参加や招聘に対するモチベーションにつながると考えています。

## UV31

福岡 × 川端通商店街

## 地域への還元も目指し、 商店街全体を懇親会の会場に

XXIX Congress of International Society of Biomechanics/  
Japanese Society of Biomechanics

約50の国や地域から約1,000名の参加者が集まる国際バイオメカニクス学会。最終日に催されるGALA DINNER（懇親会）の会場として選出されたのは、全長400mに及ぶアーケードに130軒以上の店舗が並ぶ川端通商店街。130年以上の歴史を持ち、昭和の雰囲気を残すこの商店街は、国外からの参加者にとって極めて魅力的であることに加え、コロナ禍にその価値が再認識された、屋外施設ならではの強みがあることが特徴である。商店街全体を巻き込むことで、経済的な効果が特定の施設に集中することなく、広く福岡市へと還元されることも期待し、参加者、商店街、市民の三者それぞれにメリットがある懇親会の実現を目指した。

## DATA

**会議名称**  
XXIX Congress of International Society of Biomechanics/  
Japanese Society of Biomechanics  
**主催者**  
国際バイオメカニクス学会・  
日本バイオメカニクス学会  
コンベンションビューロー  
公益財団法人  
福岡観光コンベンションビューロー  
**会議会期**  
2023/7/30-8/3  
**会議会場名**  
福岡国際会議場  
**実証プログラム会場名**  
川端通商店街  
**実証プログラム参加者数**  
国内からの参加者289名  
国外居住者899名  
**実証プログラム実施一人当たり金額**  
12,707円



福岡国際会議場で開催された学会では、さまざまなブースで研究の発表を行った。

## SCHEDULE

Day5 ユニークベニューの活用 川端通商店街	
10:00	学会プログラム コーヒープレイク
11:00	学会プログラム
12:00	ランチプレイク
13:00	学会プログラム
17:00	川端通商店街での懇親会

## 1

## UV選定の経緯

### ここでしか体験できない 日本の文化・日常を提供

今回、会議主催者が「日本でやるからにはここでしかできない体験を提供したい」と会場探しをされている中で、これまでも国際会議の懇親会の実績があり、好評をいただいていた川端通商店街をご紹介しました。昔ながらの“ザ・日本”の商店街という空間でパーティーをするのは、海外からの参加者にとってほかではできない経験だと思いますし、商店街にとっても利益につながるということで、双方にとってメリットのある懇親会にできると考えました。

特に今回は国際バイオメカニクス学会・日本バイオメカニクス学会ということでスポーツ医学の分野の先生方もいらっしゃる、会議自体もカジュアルな雰囲気、相互コミュニケーションという部分を重視されているという印象がありました。商店街の長い通り全体を会場とすることで、自然に皆さんが歩き回ることで、さまざまな方とコミュニケーションを取りやすくなったと思います。そういった意味でも学会の求める懇親会のコンセプトに合った会場であったと思います。

## 2

## 実施内容・運営について

### 開催への理解を深めるため 商店街全体へメリットの還元も

川端通商店街はこれまでも懇親会の実績はあったのですが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で4年ぶりの開催ということで、お店や担当者が替わっている店舗もあり、改めて一からご説明・ご相談して作り上げていきました。開催について商店街組合様にご協力をいただいておりますが、商店街をパーティー会場とすることについては商店街にある店舗様の中でも賛否両論あるようです。お土産や外国人の方向けの商品を扱っているお店だけでなく、地元の方が日常のお買い物にいらっしゃるお店もたくさんありますので、メリットを実感できないお店の方にも「商店街全体を盛り上げていこう」という部分で納得していただけるよう、商

店街組合の理事の方々にもご協力いただき、解決策を探しています。商店街全体に懇親会開催のメリットを還元できればと考えています。

### 福岡ならではの食や酒を提供 想定以上の好評を博す

当日はご協力いただいた商店街内の飲食店で食事の提供のほか、飲食店の少ないエリアに飲食の提供を行うブースを配置して食事や交流のためのテーブルなどを配し、400mという広さを最大限に生かして、商店街全体が活気ある空間となりました。提供する食事は、とんこつラーメンや博多うどん、博多め煮など、福岡ならではのメニューを取り入れたほか、焼き鳥や肉寿司、餃子など人気が高く食べやすいメニューもそろえました。協力いただける店舗へは極力余計な負担がかからないよう、各店舗に担当スタッフを配置し商品の受け渡し等をスムーズに行えるように事前に打ち合わせを重ねました。とんこつラーメンや博多うどんなど、行列ができる店舗があったり、開始早々に肉寿司がなくなるなど、それぞれに好評を博し、想定していたよりも料理も飲料も好評で、途中で追加注文するなど盛況でした。ベジタリアン、ムスリム等の参加者向けには、ビーガン・ハラール対応のメニューをケータリングで用意



博多港に面した会場で行われた会議では、研究の場で使われているモーションキャプチャーの実演をはじめ、さまざまな発表が行われた。

## 取材対象者

## 中上朗子さん

公益財団法人  
福岡観光  
コンベンション  
ビューロー  
アシスタントマネージャー



福岡市へのMICEイベントの誘致部門であるMeeting Place Fukuoka(MPF)に所属。海外からのインセンティブツアーの誘致担当を経て、現在は国際会議、国内学会等、主にコンベンションの誘致と開催支援を担当。主催者へユニークなパーティベニューや福岡ならではの体験プログラム等も提案している。

し、提供しました。ドリンクブースでは地元のクラフトビールや日本酒、焼酎などを提供し、この場所ならではの味をお楽しみいただきました。交流会の開催は21時まででしたが、その後、商店街内や周辺の飲食店へ2次会で流れて行った参加者も多くいたようです。

日本の生活や文化に触れる機会とするために、商店街組合から各店舗に呼びかけをしてもらい、飲食店以外の店舗も懇親会開催の時間中、極力営業を延長してもらうなど協力を依頼しました。八百屋やコンビニ、雑貨店や100円ショップ、茶舗などで買い物を楽しむ参加者の姿がありました。

また、日本ならではの文化である「ち



国際バイオメカニクス学会では、5日間にわたってさまざまな講演が用意され、最新の研究について意見交換が行われた。

「どん屋」のパフォーマンスを用意しました。華やかな着姿で演奏しながらにぎやかに練り歩く姿は、海外からの参加者には珍しく、写真を撮るなど興味を持ってもらえたようです。

### 学会を紹介するデモはやり方に課題を残す

また、川端通商店街側より、懇親会場で市民に学会の内容や取り組みがわかるような工夫をしてほしいとの依頼を受け、モーションキャプチャーのデモンストレーションを実施しました。実際に体験するには体の動きを感知するマーカーを手足に装着することが必要になりますが、交流会場で体験者に都度マーカーを装着するためにはそれなりの時間と人員が必要となることから、より手軽に体験でき

るマーカーレスでのモーションキャプチャー体験を採用しました。

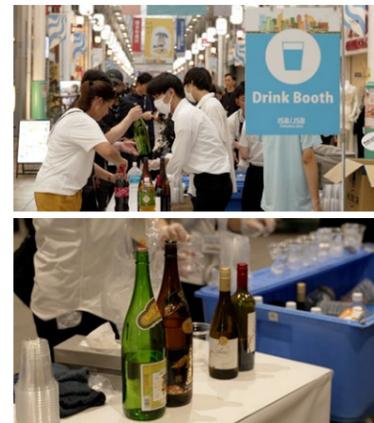
「マーカーレス・モーションキャプチャー無料体験会実施中」の立て看板を設置したものの、周りが懇親会で盛り上がっている中で、体験を試みるのはなかなかハードルが高かったようで、自ら進んで体験してみようという市民はあまりいませんでした。また、研究室ではうまく作動しても、背後に大勢の人が行き交う懇親会場では、どの人物に焦点をあてるべきなのかをシステムが判断することができず、バグを引き起こす原因となってしまうことも反省点のひとつです。

これまで会場にモニターを用意して学会の内容を紹介するレクチャーなどは開催していましたが、今回はより相互理解を深められればと体験型の学会紹介を

試みました。残念ながら期待したほどの反響はなく、どのように市民を巻き込むべきか、その取り組みには難しさを感じました。子どもも含め、大会参加者の家族などが楽しんでいる姿が見受けられたのはよかったと思いますが、市民にもメリットがある懇親会を目指し、今後も学会ごとの特徴を踏まえ、商店街組合と話し合いながら工夫を重ねていきたいと

思います。また、今回福岡観光コンベンションビューローが主催するグローバルMICEスクールの学生を運営スタッフとして派遣し、当日の運営にも関わってもらいま

し、学会紹介のため作成された吊り広告がアーケードに掲げられた。商店街全体を使い、歓談スペースやマーカーレス・モーションキャプチャー体験、行列ができるほど人気の日本酒のコーナーなどを設け、大いにぎわった。また、実施時間中店を開けた店舗で買い物をする姿なども見られた。



た。前年度開催のスクールではコロナ禍のため、リモートでの活動が中心でしたが、今年度は「世界水泳選手権2023福岡大会」など、MICEの現場を実際に体験してもらう機会ができました。この懇親会では英語対応ができる方を募集し、参加者とのコミュニケーションをとる姿も見られ、やはりリモートとは違うよい体験ができたのではないかと思います。

### 3 得られた成果と課題、今後のビジョン

#### 未来に向けて商店街店舗とは前向きな話し合いを続行

4年ぶりの開催とはいえ、これまでの反省点を生かして全体的につつがなく開催できたと考えています。参加者に事前に会場情報を案内していたため、参加者の中にはパーティー前日に商店街を訪問した方や、パーティー開催の1時間以上前の準備を進めている時間帯から商店街内をそぞろ歩く方など、懇親会そのものだけでなく、会場となる商店街に興味を持たれた方も少なくなかったようです。飲食の提供は商店街内の飲食店に協力を依頼しましたが、実際に参加された店舗からは通常以上の売上となったなど、喜びの声も寄せられました。

福岡市は2014年に「グローバル創業・雇用創出特区」という国家戦略特別区域に指定されたため、いち早く川端通商店街をはじめとした公共の道路を使うことができるようになり、こうしたイベントなどを開催しやすいというメリットがあります。ただ今回のような懇親会での利用の場合イベント自体が主に参加者同士の交流を目的としているため、飲食やネットワーキングに時間を費やす参加者が多く、特に飲食店以外のお店ではネガティブな印象を持つ店舗も少なくありません。懇親会の開催に否定的な意見を持つ店舗の声にも耳を傾けながら、理解を得る努力を続けていく必要があると思います。商店街組合の理事の方々は、商店街でのイベント開催には前向きなので、商店街全体の利益となるような取り組みを今後も模索し、よりよいイベントとなるように今後も協力していきたいと

思います。ハード面の課題としては、今回夏の開催ということで、商店街自体にエアコン



が効いているわけではないので、熱気はかなり暑かったということ、トイレは近くの公園の公衆トイレをご案内することになり、位置や数的にも十分ではないため、今後改善が必要と思われます。

#### 懇親会会場としての強みが国際会議誘致の一助にも

商店街側でも熱心にイベントなどを開催していて、インバウンドの観光客なども多いそうですが、こうした国際学会の懇親会を開催することで、世界中の大学の先生など、観光目当てではない層に商店街をアピールできるのはとてもよい機会だと思

います。華やかなちどん屋には多くの参加者がカメラを向けた。参加者同士はもちろん、商店街の人たちとの会話を楽しむ姿も見られた。

今回は学会の開催が先に決まっていますが、そこから懇親会の会場の選定となりましたが、学会の開催地を決める時点で懇親会会場も含めて検討され、ユニークベニューがあることが理由のひとつとして開催地が決まった例もあります。川端通商店街は日本文化、日常生活を体験できることに加え、アーケードの商店街なので、雨の日の代替案が必要ないことも大きな強みとなっています。ユニークな会場で懇親会を開催できる都市として、国際会議誘致の際にも今回の事例を紹介していきたいと思っています。

## UV30

徳島 × 本家松浦酒造酒蔵

酒・食・芸能の3本立てで  
徳島の伝統文化を世界に発信第7回省エネルギーおよび汚染防止のための熱/  
物質移動の進歩に関する国際ワークショップ

「第7回省エネルギーおよび汚染防止のための熱/物質移動の進歩に関する国際ワークショップ」のウェルカム・パーティーにあたる懇親会を、創業200余年の老舗「本家松浦酒造」の酒蔵で開催。当日は地酒、地域の食、伝統芸能の3本立てで、徳島県および日本の文化を世界に発信するとともに、地域の消費拡大を図った。海外からの参加者にとっては、フォトジェニックな酒蔵での特別な体験であり、国際学会誘致のキーパーソンから「日本への誘致の際には、ぜひ酒蔵でのプログラムを提案したい」との声がけもいただいた。欧州でユニークベニューとして活用されているワインセラーに引けをとらない、日本の酒蔵のポテンシャルの高さを証明する結果となった。

## DATA

会議名称  
第7回省エネルギーおよび  
汚染防止のための熱/  
物質移動の進歩に関する国際ワークショップ  
主催者  
中四国 熱化学工学研究会、日本伝熱学会  
中国四国支部、徳島大学  
コンベンションビューロー  
一般財団法人 徳島県観光協会  
観光・コンベンション振興課  
会議会期  
2023/8/5  
会議会場名  
あわぎんホール  
実証プログラム会場名  
本家松浦酒造酒蔵  
実証プログラム参加者数  
国内からの参加者34名  
国外居住者114名  
実証プログラム実施一人当たり金額  
15,670円



200余年の歴史を持つ「本家松浦酒造」の、フォトジェニックな酒蔵をユニークベニューとして活用。

## SCHEDULE

	Welcome party 「Sake brewery」
18:40	シャトルバス出発 あわぎんホール 発
19:20	シャトルバス到着 本家松浦酒造 着 到着後「酒蔵」に移動
19:30	開会 ・挨拶 ・乾杯 ・阿波人形浄瑠璃 (乾杯後すぐ出演 約10分程度)  【懇談】
20:30	・ジャズ演奏(約40分程度)
21:30	閉会  終了後、シャトルバスで移動

## UV選定の経緯

独自イベントを  
実施してきた酒蔵の  
ポテンシャルに期待

「本家松浦酒造」は、この地で200年以上続く酒蔵で、徳島県観光協会も厚い信頼を寄せる観光スポットのひとつです。古き良き日本の伝統を海外からの参加者にアピールできることに加え、団体客の受け入れにも積極的であること、また以前にも学会に付随するツアーの立ち寄り先として選ばれた実績があったことが決め手となり、今回ユニークベニューに選定されました。これまでの学会開催にお



上)2023年8月、徳島駅から徒歩圏内に位置する「あわぎんホール」にて開催された国際学会「第7回省エネルギーおよび汚染防止のための熱/物質移動の進歩に関する国際ワークショップ」のひとつ。右)会場となった徳島市は、公共施設や商業施設がコンパクトにまとまった魅力的な街。

いては、主催者側から「特別講演のような形で、地元の方にも何かお話をさせていただきたい」とのご要望も多く、当方でも以前、本家松浦酒造蔵元杜氏・松浦素子さんに登壇をお願いしたことがありました。そうしたご縁もあって、今回も快くご協力いただけました。

10代目に当たる蔵元は全国でも珍しい女性杜氏で、歴史ある酒蔵をさらに100年継続させることを目指し、さまざまな活動を行っています。伝統と最新技術の融合により生まれた「LED酵母」を用いた酒を開発したり、直売所の運営や蔵の見学、交流イベント等を実施したり、また、普段から蔵で立ち飲みの試飲イベント等を開催するなど、酒蔵を「人が集まれる場所」として開放しています。そうした経験やノウハウを今回の懇親会にも役立てていただけたのではないかと、この期待もありました。

参加者・受け入れ側、  
双方にメリットをもたらす

本家松浦酒造の酒蔵の内部には立派な梁があり、かつて酒造りに使われていた巨大な滑車なども保存されています。私たちでも思わず目を奪われるほどですから、海外からの参加者にとっては大変珍しく、魅力的に映るでしょう。また、今回は母屋や中庭も開放していただけることで、昔ながらの日本建築に触れてもらう、またとない機会になると考えました。その一方で、蔵の一部は改装されており、内部の見学が可能であること、試飲ができるショップが併設されていて、気に入ったお酒をその場で購入できることにも注目しました。実際、懇親会当日

## 取材対象者

## 川又健治さん

一般財団法人  
徳島県観光協会  
観光コンベンション  
振興課長補佐



徳島コンベンションビューローを経て、2008年徳島県観光協会に入職。主にMICE業務を担当。他、インバウンド業務にも携わる。

は参加者がこぞって酒を買い求め、参加者と酒蔵、双方にメリットをもたらす結果となりました。

## 実施内容・運営について

予算と言葉の壁を  
乗り越えて  
最高のおもてなしを

懇親会で提供する食事やアトラクションの内容については、限られた予算内でできるだけ主催者側の要望に応えるべく、検討を重ねました。今回は国の事業に採択されて予算をつけていただいたわけですが、予算がつかなかった場合も想定して、プログラムを何パターンか用意しておきました。開催日が迫っていたこともあり、ひとつがNGになってから次を提案したのでは間に合いません。代替案に変更となった場合の段取りを含め、臨機応変に対応できるよう、現地のステークホルダーとも連携して臨みました。



当日の食事については、とにかく十分な量を用意して、開始早々にお皿が空にならないよう調整してほしいとのリクエストがあったので、今回は量を重視してケータリング業者を選びました。学生など若い参加者が多い学会だと料理がすぐなくなり、それがクレームにつながるものがままあるからです。

料理には徳島県産、四国産の食材をふんだんに盛り込みました。徳島は山海の食材に恵まれた土地柄で、農産物、畜産物、魚介類、いずれも種類が豊富です。今回は夏の開催だったので、徳島名産の



半田そうめんや、徳島県産の鰻のお寿司など、夏らしい料理を楽しんでいただきました。そのほか、鳴門金時(サツマイモ)の天ぷら、阿波牛のグリルなど、地の食材を、その持ち味を生かした調理法で提供。参加者の中にベジタリアンがいるということで、ビーガン対応の料理も用意しました。

ドリンクは、「LED酵母」仕込みの日本酒など、「ここでしか飲めない」日本酒を中心に提供しました。海外からの参加者に向けて、懇親会の冒頭に松浦さんに英語で日本酒の説明してもらったほか、



本家松浦酒造酒蔵での懇親会では、日本酒の利き酒体験が人気を博した。その際、マイグラスを提供し、SDGsにも配慮した。食事はビュッフェスタイルで、地元産の山海の幸をふんだんに盛り込んだ料理を提供。アトラクションとして、ジャズの演奏もプログラムに盛り込んだ。

お酒や料理の説明書きも英語表記のものを用意しました。今回はSDGsの観点から会場の一画に食器やゴミの回収場所を設置して、ゴミは細かく分類してもらったのですが、その案内表示、例えばどこに何を捨てるか、どのように分別するかも英語で表示し、海外からの参加者も迷わず対応できるようにしました。

また、同じくSDGsの観点から参加者それぞれにグラスを渡し、会場で「マイグラス」として利用するように促しました。ただ、そこかしこに置き忘れる可能性があったので、会場で使用したグラス



アトラクションとして阿波人形浄瑠璃を披露。舞台を設えずに上演できる演目をチョイスした。

とは別に、本家松浦酒造のロゴが入ったオリジナルのグラスを提供しました。お土産として喜んでもらいたかったのはもちろん、旅の思い出としてSNSにアップされることも見込んでのことでした。

### 知られざる郷土文化を世界に発信するチャンス

懇親会のアトラクションとしては、阿波人形浄瑠璃の上演と、ジャズ演奏を行いました。徳島といえば、まず阿波踊りが頭に浮かぶと思うのですが、人形浄瑠璃も歴史ある伝統芸能です。テレビなどの娯楽がなかった時代には、各地の神社に地域の人が舞台を設え、盛んに上演されていたといえます。今回は舞台がなくても上演できる「三番叟(さんばそう)」という演目を披露したのですが、懇親会の参加者、人形浄瑠璃の団体の方々、双方に大変喜ばれました。今回こうした、あまり知られていない郷土文化を世界に向けて発信できたことも、大きな成果だったと思います。

一方のジャズも徳島では古くから親しまれており、市内にはジャズバーも数多く存在します。ちょうど「徳島ジャズストリート」というイベントが懇親会の翌日に開催予定だったこともあり、タイミングよく地域の文化に触れていただくことができました。

### 3 得られた成果と課題、今後のビジョン

#### ユニークベニューでのプログラムを成功へと導くカギ

今回のようなユニークベニュー・プログラムを成功させる上で欠かせないのは、主催者側のご意向を正確に捉えること。これに尽きます。プログラムを提案する段階で「ぜひ、やりたい」と、前向きな気持ちになってもらえる内容を盛り込むことが重要です。今回は前もってシンポジウムの座長である徳島大学の出口祥啓教授に現場を見ていただきながら、具体的な内容を詰めていきました。

#### スムーズな運営に欠かせない現場のマンパワー

今回は本家松浦酒造のポテンシャルに依るところが大きかったわけですが、振り返ってみると、ハード面のみならず、マンパワーの面でも秀でていたことが、成功をもたらすカギだったと思います。当代はもちろん、現場にホテル勤務の経験があり、業者の手配や現場の取り仕切りに精通した店長がいたのは心強かったです。こちらが出すアイデアに対して、毎回迅速に、具体的かつ的確なご提案を

いただくことができ、大いに助けられました。ケータリング・音響・運輸・郷土芸能など、地元のステークホルダーのマッチング・連携も非常にうまくいき、今後に向けての協力体制も強化できたと思います。

懇親会の実施に向けて、大きく立ちほだかるのが予算の問題ですが、今後もユニークベニューとして予算額に応じた内容で提案・活用していくべきでしょう。本家松浦酒造に関しては、今回の会場とは別の蔵も現在改修を行っており、完成したら収容人数が200名にまで増えるとのこと。今後も継続して、本家松浦酒造を新たなユニークベニュー・プログラムのパッケージとして提案できれば、国際会議誘致活動に弾みがつきそうです。また、今回の成功は、別のユニークベニューで同様のパッケージを開発する際の規範となりますし、そのモチベーションを高めてくれました。

今後に向けて改善すべき点としては、トラブルが起こった際の対応策が挙げられます。今回、体調を崩された方がいらっしゃり、タクシーを手配してお帰りいただいたのですが、例えばこれがホテルだったら、もっとスムーズに対応できたことでしょうか。コンベンションビューローとしても、こうした事態の対応策をマニュアル化して、今後に備えたいと思います。

## UV10・EX10

千葉 × 見浜園・千葉市美術館

# ローカル色を生かした ユニークベニューの活用事例

9th International Discussion Meeting  
on Relaxation in Complex Systems (9IDMRCS)

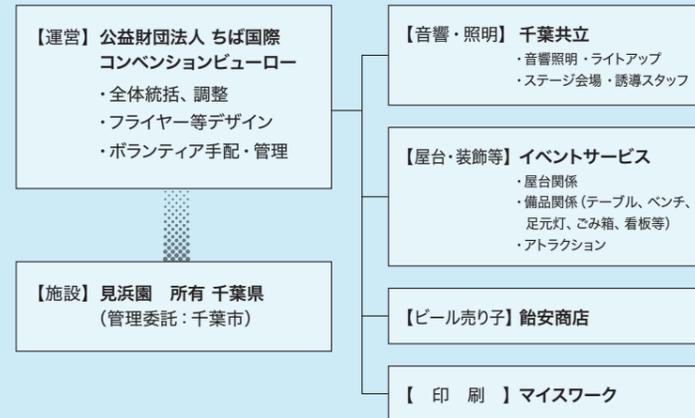
幕張メッセに程近い日本庭園「見浜園」をユニークベニューとして活用。同園を所有する千葉県および園を管理する千葉市の支援を得て、日本の「夏祭り」をイメージしたバンケットを開催した。緑日景品として千葉ゆかりのグッズを多用したほか、千葉の食材を用いた料理や地ビールなどを屋台で振る舞い、千葉らしさをアピールした。また、学会参加者向けの同伴者プログラムとして、エクスカージョンも実施。千葉市美術館で浮世絵をテーマとした体験型プログラムに加え、美術館内の講堂をユニークベニューとして活用し、寿司職人によるパフォーマンスを交えたランチレセプションを開催した。いずれも今後につながるプロジェクトとして、学会関係者の注目を集めた。

### DATA

会議名称  
9th International Discussion Meeting  
on Relaxation in Complex Systems  
(9IDMRCS)  
主催者  
9IDMRCS組織委員会  
コンベンションビューロー  
公益財団法人  
ちば国際コンベンションビューロー  
会議会期  
2023/8/12-8/18  
会議会場名  
幕張メッセ国際会議場  
実証プログラム会場名  
見浜園、千葉市美術館  
実証プログラム参加者数  
UV10  
国内からの参加者90名/国外居住者210名  
EX10  
国内からの参加者7名/国外居住者33名  
実証プログラム実施一人当たり金額  
22,250円

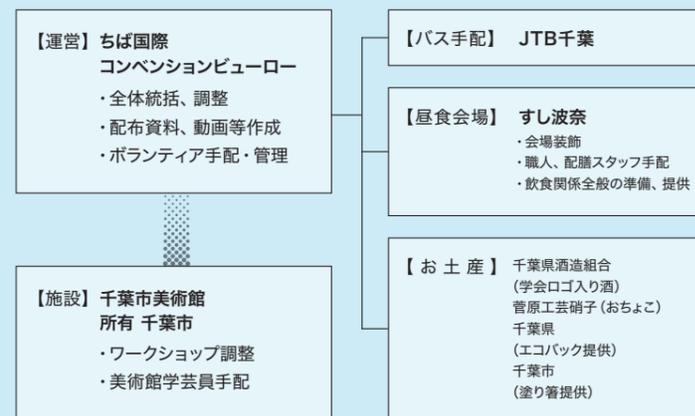
### 実施体制①

UV10/見浜園をユニークベニューとしたバンケット



### 実施体制②

EX10/千葉市美術館でのエクスカージョン



千葉市美術館の講堂をユニークベニューとして利用し、ランチに寿司懐石を提供。美しい盛り付けが好評で、参加者はこぞって写真撮影に興じた。アトラクションとして、寿司職人が江戸前寿司および房総の郷土料理である大巻き寿司の技術を披露。地酒の利き酒体験も実施した。参加者はなごやかに談笑しながら、千葉の味を堪能した。



### 1

#### UV選定の経緯

### 日本庭園や美術館を ユニークベニューとする 初めての試み

これまで国際会議誘致の際には、県内の著名な観光地・施設等の紹介が中心となっていました。千葉市内にも地域独特の歴史や魅力的な伝統工芸があります。そうした歴史文化を内外にアピールするために、今回、市内の日本庭園や美術館をユニークベニューとして活用しました。

幕張メッセ国際会議場から徒歩5分圏内にある日本庭園「見浜園」では、日本の夏祭りをテーマとしたバンケットを開催しました。これまで茶室での少人数の食事を開催した実績はありましたが、庭

園自体をパーティー会場として活用するのは初めてで、見浜園を所有する千葉県および園の管理委託を受けている千葉市からも、今後の活用につながることを大きく期待され、支援を得ることができました。

また、会議参加者向けの同伴者プログラムとして、千葉市美術館で実施された体験型プログラムに付随したランチレセプションも実施しました。このランチレセプションは、館内の講堂をユニークベニューとして利用しています。美術館の一面をユニークベニューとして利用するのも初の試みです。将来的にモデルケースとなることを期待して、今回は講堂での寿司職人による寿司パフォーマンスを交えた提供を行うプログラムを企画・実施しました。

### 2

#### 実施内容・運営について

### 夏祭りをイメージした バンケットで 地産地消とSDGsを实践

見浜園でのパーティーでは、千葉の食材を使った料理を提供する屋台や日本の文化を体験できる緑日イベントを用意。緑日景品として、千葉県マスコットキャラクター「チーバくん」といった千葉ゆかりのグッズを多用するなど、開催都市を感じられる企画を盛り込みました。また、会場には地域ボランティアを配置。ボランティアは参加者とのコミュニケーションを積極的に図り、千葉らしいアットホームさを演出できたと思います。

提供する料理には千葉の食材をふんだ

んに使用し、誰もが安心して食べられるよう、食材表記を徹底しました。飲料も地酒や地ビールなどを振る舞い、千葉らしさをアピールしました。また、パーティーのアトラクションとして、日本らしさが感じられる、舞妓さんによるウェルカミングや三味線のパフォーマンスなどを実施しました。舞妓さんには園内を回遊してもらい、写真撮影や参加者からの質問に答える時間を設けました。

パーティーの運営にあたっては、地域色を出すことに加え、SDGsも意識し、再生可能な食器を使用しました。屋台での料理の提供には「バガス」という、サトウキビの搾りかすや竹、麦などをリサイクルした容器を使用。飲料についても、千葉ロッテマリーンズのビール売り子が提供する紙コップ以外は、全て再生可能な容器で提供しました。千葉の地ビール、

ご当地レモンソー、ラムネなどは瓶、ワインは缶入りのものを提供し、そのまま飲んでもらうことで、環境への負荷が大きいプラカップなどを使用せずに済むようにしました。また、清掃とゴミの分別も徹底して行うことで、日本の清潔さとゴミ処理に関する意識の高さをアピールできたと考えています。

### バイリンガル対応の体験プログラムが魅力のエクスカージョン

千葉市美術館をユニークベニューとして活用する試みは、会議参加者の同伴者に向けたエクスカージョンの一環として行われました。エクスカージョンは体験型プログラムを中心とし、美術館到着時には館長によるウェルカムレクチャーと学芸員による浮世絵の説明を英語で実施。

その後、日本の伝統技術である版画のワークショップを、ボランティアによる英語でのサポートを付けて行いました。

今回の学会では、全てのエクスカージョンにコンベンションビューローの職員および英語ボランティアが同行し、参加者をサポートしていましたが、千葉市美術館は館内に英語表記が少なかったため、事前に館内案内や展示作品の説明を英訳してチラシを作成し、参加者に配布するなどして、バイリンガル対応をさらに強化しました。

### 美術館の講堂をユニークベニューとし、郷土の食文化を紹介

普段は会議室として利用されている講堂をユニークベニューとして活用したランチレセプションでは、寿司職人による



古代から中世にかけて活躍した千葉氏の居城・千葉城(亥鼻城)跡に建てられた千葉市立郷土博物館(右上)で、参加者は千葉の歴史を学んだ。ツアー終了時に「次回は家族や友達を連れてきたい」との声も。千葉市美術館(下)では、館長および学芸員によるレクチャーの後、日本の伝統技術である版画のワークショップを行った。



房総郷土料理「太巻き寿司」や江戸前寿司の技術を披露しました。また、地の食材を活用した昼食や利き酒を通して、千葉の食の魅力の周知にも努めました。

時間の制限があった上、流しのない場所で調理するという、寿司職人にとっては難しい条件下での実施となりましたが、タンクで水を用意するなどして問題を解決し、江戸前寿司を参加者の目の前で握って提供することができました。房総太巻き寿司については、巻くのに時間がかかるため、事前に調理工程や巻き方などを撮影。当日、会場でその映像を流し、実際には切るところから行うことにしました。また、房総太巻き寿司の歴史や会場を飾った生花の紹介、寿司職人との記念撮影など、普段ではできない特別な体験を多く盛り込みました。参加者からは、「今まで見た食べ物の中なかでいちばん美しい」との感想や、「寿司の歴史、太巻き作りの動画がとても興味深かった」といった声が寄せられたほか、当プログラムに参加して、千葉の地酒や土産物に関心を持ったという方もいました。購入可能な場

所に関する問い合わせも複数あったので、経済効果も大きかったと考えています。

### 3 得られた成果と課題、今後のビジョン

#### 将来的にも開催効果拡大を期待できる新たな魅力を創出

観光庁の実証事業の一環として行った、見浜園や千葉市美術館をユニークベニューとする試みは、コンベンションビューローが組織を上げて対応したことに加え、千葉県・千葉市の理解と支援を十分に受けられたことで成功を収めたと考えています。

見浜園でのバンケットについては、採択から実施までの期間が短く、消防等への申請や手配先業者等との調整に苦労しましたが、当日は天候に恵まれ、全てが想定どおり、円滑に進行しました。実行委員の方から次々と高い評価と感謝のコメントをいただいた他、参加者からは感動の声が多く寄せられ、ロケーション・

初めて日本庭園・見浜園をユニークベニューとして活用し、夏祭りをテーマとしたバンケットを実施。夜の日本庭園をより魅力的に見せるため、またエンターテインメント性を入れるため、緑日イベントを用意した。当日は地元ボランティアが浴衣を着てサポートし、アットホームな雰囲気も醸成した。

食事内容・演出・幻想的な雰囲気を含めたパーティー全体に対する満足度の高さがうかがえました。開催効果拡大を期待できる新たな魅力を創出できたという実感があります。

今回のように日本庭園をユニークベニューとして活用していくためには、まだまだ解決すべき課題も残っていると思います。特に懸念されるのは当日の天候で、これは屋外型ユニークベニューの宿命といえますが、悪天候で開催することになった場合のバックアップ体制を並行して準備するのは、相当な労力を伴うと思います。とはいえ、今回の実証でさまざまな知見や人脈を得ることができたという確かな手応えはあるので、国際会議誘致のための魅力あるメニューとして、今後の活動に生かしていきたいと考えています。

## UV23

姫路 × 姫路市立美術館前庭

# SDGsを体現する建造物を 間近に懇親会を開催

7th Global Summit on Process Safety hosted  
by CCPS and JSSE

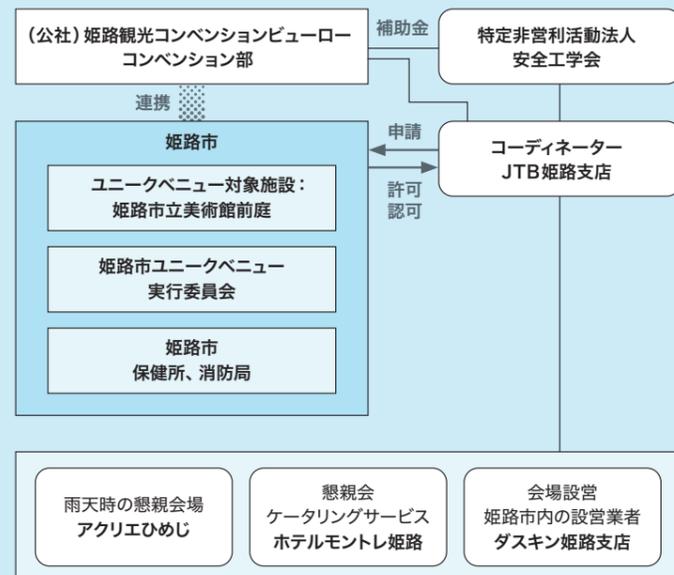
2023年11月27日～29日に姫路市「アクリエひめじ」にて開催された国際会議「7th Global Summit on Process Safety hosted by CCPS and JSSE」の懇親会を、28日の夜に開催した。会場は、姫路市が設定した「ユニークベニューHIMEJIプラン」の中から選ばれた「姫路市立美術館前庭」。姫路城の石垣や白漆喰、明治時代のレンガ造りの建物を利用した美術館など、SDGsを感じられる建造物を間近に見ながら、237名（海外からの参加者は119名）の参加者には立食形式で地元食材を用いた料理や地酒を楽しんでもらった。アトラクションとして樽酒の鏡開き、忍者ショー、姫路の秋祭りに舞う獅子舞も披露し、日本、そして姫路の文化を内外に向けてアピールした。



奈良の法隆寺とともに、日本初の世界文化遺産となった国宝姫路城。

### 実施体制

#### UV23 / 姫路市立美術館前庭にて開催した懇親会



### DATA

会議名称  
7th Global Summit on Process Safety  
hosted by CCPS and JSSE  
主催者  
特定非営利活動法人 安全工学会  
コンベンションビューロー  
公益社団法人  
姫路観光コンベンションビューロー  
会議会期  
2023/11/28  
会議会場名  
アクリエひめじ  
実証プログラム会場名  
姫路市立美術館前庭  
実証プログラム参加者数  
国内からの参加者118名  
国外居住者119名  
実証プログラム実施一人当たり金額  
28,698円

## 1

### UV選定の経緯

## 保存活用される 歴史的建造物を間近に見て SDGsを感じる懇親会に

当会議を主催する安全工学会は、「産業に係わる安全の諸問題を広く工学的に調査・研究し、各種災害の防止のための知識・技術の向上及び普及を図り、もって産業及び学術の発展並びに社会の安全・安心の獲得に貢献すること」(定款第3条)を目指して活動しており、SDGsの17の目標および169のターゲットの

赤レンガ作りの姫路市立美術館前庭にて、立食スタイルのバンケットを開催。開会のあいさつに続き姫路の樽酒を使った鏡開りを8名で行った後、旬の地元産食材を使った料理を楽しんだ。多様なバックグラウンドを持つ参加者への配慮として、ハラルフレンドリー、ベジタリアン対応の料理も用意した。



達成を基礎から、工学的学術面から支えることを目的としています。昨年の、姫路での国際会議の懇親会開催においても、SDGs達成を意識して会場を選びました。懇親会の会場となった国宝・姫路城は、約400年前に築城され、1993年に奈良の法隆寺とともに日本で初めて世界文化遺産に登録されました。30年ごとに修理計画が定められており、平成の大修理は2015年に終了。その後も毎年修理を重ねている様子はSDGsを体現するものです。一方、併設する姫路市立美術館は、明治時代に建てられた赤レンガ造りの美しい建物で、元は旧陸軍が所有していましたが、1983年に美術館として生まれ変わりました。このように、古い建築物に新しい役割を持たせ、保存活用することも、SDGsそのものといえるでしょう。



## 2

### 実施内容・運営について

## 大切に保存活用される 歴史的建造物を臨む庭園で 立食パーティーを開催

懇親会は11月28日の夜に開催。午後5時半に会議が終了した後、会議場であるアクリエひめじから237名の参加者がバス6台に分乗し、姫路市立美術館前庭まで移動しました。当日は寒さが厳しかったため、参加者全員に使い捨てカイロを配布。LEDとガス灯でそれぞれライトアップされた姫路城と美術館を同時に楽しむことができる会場には、パラソルヒーターを6台設置し、暖をとってもらいました。

懇親会での食事は立食形式とし、姫路



城の東側に位置する「姫路市立美術館前庭」にて午後6時半にスタート。開会のあいさつ後、姫路の樽酒を使った鏡開きを8名で行い、その後に地元産の秋の食材をふんだんに使った料理を提供しました。アラブ諸国やインド地域からの参加者が多かったため、ベジタリアンに対応するほか、ハラールフレンドリーの食材を用いた料理も用意。樽酒を振る舞う際には、姫路城世界遺産登録30周年記念の盃を用い、それを参加者全員にお土産として持ち帰っていただきました。

アトラクションとしては、姫路市内の忍者隊による忍者ショーおよび姫路の秋祭りに行われる獅子舞を実施しまし

パンケットのアトラクションとして、姫路の秋祭りに舞う獅子舞と忍者が登場し、大いに会場をにぎわせた。忍者ショーでは希望する観客が舞台上に上がって、忍者とのバトルを体験。参加型アトラクションとして好評を博した。



た。忍者ショーは参加者を舞台上げの参加型アトラクションとなり、にぎやかに進行。獅子舞は舞台から下りて観客席を練り歩き、会場を大いに沸かせました。特に獅子舞は好評で、舞台上で参加者との記念撮影をして喜ばれました。その後、獅子舞の前で閉会のあいさつがあり、最後は万歳三唱で懇親会を締めくくりました。

懇親会終了後、希望者には姫路城三の丸広場で行われていたイベント「鏡花水月」へもご案内。美術館前庭から三の丸広場へ移動する間に、姫路城の石垣と、白漆喰の白壁を間近に見ていただきました。漆喰は、使用後は土に還ることから、SDGsを象徴する素材と捉えられています。こうした部分からも、姫路城の保存活用に生かされているSDGsを感じてい



ただけたと思います。

### 雨天に備えて 室内で懇親会を開催する 別プランも用意

今回のユニークベニュー、姫路市立美術館前庭での懇親会は屋外での開催となるため、雨天を想定した代替案も用意する必要がありました。通常はホテルのバンケットルームを押さえた上で野外会場での準備を進めて、どちらで開催するにせよ、そのホテルのスタッフがサービスを担うことになります。しかし、今回は懇親会日程が当初予定していた11月27日から28日に変更になり、その時点でホテルのバンケットルームは全て予約済みとなっていました。そこで今回は、会議会場である「アクリエひめじ」の展示

場Bを予備の会場として確保したのですが、消防署、保健所への届け出が必要となり、ユニークベニュー会場に加えて二重の手続きをすることになりました。

ユニークベニュー会場で実施するか、雨天時の会場にするかは、開催日の5日前の天気予報を見て決定することにして準備を進め、晴天の予報が出たため、その後はユニークベニュー会場での実施に向けて進行することができました。会場が確定するまでは倍の労力を要しましたが、結果として、アクリエひめじで懇親会を行う場合の契約や届け出の手続きなどについて知ることができました。この経験を、今後役に立てたいと思います。

アトラクションの後、獅子舞は観客席に下りて会場を練り歩き、参加者との記念撮影にも応じて喜ばれた。パンケットの最後は、獅子舞の舞台の前で閉会の挨拶を行った。その際、参加者全員で万歳三唱となり、最後までにぎやかに進行した。



### 3 得られた成果と課題、今後のビジョン

#### オール姫路で連携して 地域の魅力を発信するとともに ノウハウを蓄積

今回、JNTOの実証事業としてユニークベニューを利用した懇親会を開催することができ、多くのノウハウを得ることができました。特に、姫路城周辺の特別な施設の利用に関しては、姫路市、消防署、保健所などへの届出書類の提出などができ、初めての経験が多かったのですが、一通り経験したことで、次回はよりスムーズに進行できる自信ができました。また、我々コンベンションビューローのみならず、コーディネーターのJTB、ケータリングを担ったホテルモントレ姫路を

はじめとする多くの姫路の事業者および、忍者ショー、獅子舞などのアトラクション関係の方にも関わっていただき、一丸となって進行することができたことも、今後に向けての大きな一歩となりました。

今回海外からの参加者が全体の50%を超えたことを、会議主催者である安全工学会側は喜んでおり、主催者として日本、そして姫路の魅力を内外に発信できたという、確かな手応えを感じています。2024年にも姫路で開催を予定している学会・大会がいくつかあり、そのうちの3~4件については、主催者がユニークベニューを利用した懇親会を検討しています。我々コンベンションビューローとしては、今回得たノウハウを生かし、懇親会成功に向けて協力していく所存です。



## 令和5年度 採択事業一覧

UV08

郡山 × 四季の里 緑水苑

### 風光明媚な庭園と 日本の食文化体験を融合

14th International Congress on Advanced  
Applied Informatics (IIAI AAI 2023)

主催：特定非営利活動法人  
国際応用情報学研究機構  
CB：公益財団法人 郡山コンベンションビューロー



福島県のほぼ中央に位置する広大な庭園「四季の里 緑水苑」にて、野外フェス型ランチョン招待講演会と伝統芸能ひょっこり踊り披露を実施。「国際会議」「風光明媚なユニークベニュー」「日本の食文化体験」を融合し、海外からの参加者に強い印象を残した。全天候に対応できるテントやステージ等を設営。食事は地元食材を用いたバーベキューをメインとし、ベジタリアン・ビーガン・ハラルの参加者が食材を容易に確認できるようにした。

ランチョン招待講演会の前後には、笹の川酒造（日本酒、ジャパニーズウイスキー）、宝来屋本店（味噌）、神社や古墳を訪問する文化体験ツアーを実施。また、産総研福島再生可能エネルギー研究所の見学を行い、科学技術力の高さと安全性をアピール。今後のインバウンド獲得の一助を担うべく、フォトコンテストおよび記録ビデオの制作も行った。

EX09

郡山 × ふくしま逢瀬ワイナリー等

### 震災からの復興状況と 継承された伝統・文化を紹介

Asia-Pacific Regional IAU Meeting 2023  
(APRIM2023)

主催：アジア太平洋地域の天文学に関する国際会議  
(APRIM2023)組織委員会  
CB：公益財団法人 郡山コンベンションビューロー



東日本大震災および原発事故からの復興・風評被害払拭の取り組みを周知するとともに、今後のMICEや観光客誘致につなげていくことを目的とした日帰りのエクスカージョンを実施。食事付きの1日コースのほか、会議の中日でも参加しやすい半日コース（食事なし）を設け、現在の福島県における復興状況および震災を乗り越えて継承されてきた伝統・文化を紹介した。訪問先は、環境放射線への理解を促進する「コミュニティ福島」（三春町）、東日本大震災からの復興支援を目的に設立された「ふくしま逢瀬ワイナリー」（郡山市）、郡山から世界市場に挑み風評被害払拭にも取り組んでいる「笹の川酒造」など。また、福島県の歴史や文化を知るきっかけとして、会津の伝統食を中心とした食事メニューを開発・提供するなど、今後も継続して実施可能なコースを設定することで、国際会議の誘致力を向上させた。

地域32

福岡 × 福岡PayPayドーム

### 若年層にも親しみやすい 市民参加型イベントを開催

第31回日本心血管インターベンション  
治療学会学術集会 (CVIT2023)

主催：第31回日本心血管インターベンション治療学会  
学術集会  
CB：公益財団法人 福岡観光コンベンションビューロー



8月4日から6日にかけて行われた標記学術集会の最終日、会場のひとつである福岡PayPayドームにて市民参加型イベント「脈博-Heart Beat Expo-」を開催。プレスリリースやチラシ、SNSを活用した事前告知により、当日は当初の予想を大幅に上回る5,000人が来場した。会場では「心血管と医療」をテーマに専門医やスポーツ選手、心筋梗塞・脳卒中を経験したタレントなどがセミナーやトークショーを繰り広げたほか、誰もが気軽に参加できるスポーツのコーナーや実際の手術に使用される手術器具（カテーテル）を操作できるブースなど、親子で楽しめる体験型コンテンツも多数展開。学会の市民公開講座への参加は高齢者に偏りがちだが、今回は若い世代の参加も多く、特に突然死の多い40～50代が自身の健康について家族と話し合うきっかけとなったことについて、各方面から大きな反響があった。

仙台 × サンモール一番町商店街

## 街の空気を感じられる 商店街にて懇親会を開催

第46回日本神経科学大会  
(JNS2023)

主催：一般社団法人 日本神経科学学会  
CB：公益財団法人  
仙台観光国際協会 MICE推進部



仙台市民の生活拠点であり、ビジネスや観光で訪れる人々でもにぎわう仙台駅西口に広がるアーケード街。その一角を占める「サンモール一番町商店街」にて、500人規模の懇親会を実施した。通常、学会の懇親会はホテルや会議場で行われるが、本学会においては仙台の街並みを象徴する商店街を舞台に、街の空気を感じながら地元の商店や人々と触れ合う機会を提供。笹かまぼこや牛タン等、仙台名物を用いた食事メニューの提供、地酒を紹介する利き酒コーナーの設置、伊達武将隊との記念撮影など、仙台の文化や物産への関心を高める企画を実施し、好評を得た。懇親会終了後も現地に残留して周辺の店舗を利用する参加者も多く、地域への貢献にもつながった。今回、500人規模の懇親会を成功させたことで、商店街を仙台の新たなユニークベニューとして提案ができるようになり、今後のMICE誘致にも弾みがついた。

名古屋 × 円頓寺商店街

## 雨天でも活用可能な アーケード式商店街を活用

2023 International Conference  
on Solid State Devices and Materials  
(SSDM2023)

主催：公益社団法人 応用物理学会  
CB：公益財団法人  
名古屋観光コンベンションビューロー



当初は名古屋城内苑でのバンケットを予定していたが、雨天により、円頓寺商店街での開催に変更。城下町の面影を今に伝えるアーケード式商店街にて、地元独自の食文化である発酵食品を多用した「なごやめし」を中心とした、円頓寺商店街の名物メニューを提供した。ウェルカムドリンクとして名古屋城オリジナルクラフトビール「HOPPING SHACHI」と名古屋の美味しい水道水、本丸御殿缶の「名水」を用意。名古屋市内の酒蔵の日本酒（4種）を瀬戸焼と美濃焼のお猪口で提供して地場産業をPRしたほか、リユース可能な什器や国産木材・間伐材を使用したリターナブル食器を利用することでSDGs達成への取り組みをアピールした。アトラクションとしては、名古屋ゆかりの戦国武将や姫に扮したおもてなし部隊が登場。英語で名古屋文化を説明したり、参加者と一緒に写真を撮ったりして、場を盛り上げた。

熊本 × 熊本城/阿蘇エリア

## 雄大な自然の驚異と 震災からの復興を見せる

The 17th International Conference on  
Innovative Computing, Information and  
Control (ICIC2023)

主催：ICIC International学会  
CB：一般財団法人  
熊本国際観光コンベンション協会



本学会の参加者を対象に「自然の驚異と恵み」をテーマとし、阿蘇を目的地とした日帰りのエクスカーションツアーを実施。「熊本地震震災ミュージアム『KIOKU』」、白川水源などを訪問し、「人々は自然の多くの面を知り、共存していかなければならない」というメッセージを発信するとともに、SDGsにも言及できる、新たな阿蘇観光の価値を提供した。

学会最終日には、熊本のイベント設営業者・観光施設（レストラン）、熊本で活動するアーティスト・団体など、地元をよく知るステークホルダーの協力を得て、熊本城特別見学通路（「見せる復興」を掲げ、熊本地震後に新たに開通した地上約6mの見学ルート）にてフェアウェルパーティーを開催。熊本城の有料区域が貸切となることや、熊本城天守閣を間近に眺めながら飲食ができることの特別感が、内外からの参加者に高く評価された。

広島 × 広島城・護国神社

## 城と神社のサポートを得て 歓迎レセプションを開催

第20回国際有害毒藻類学会  
(ICHA2023)

主催：一般社団法人  
第20回国際有害毒藻類学会実行委員会  
CB：公益財団法人 広島観光コンベンションビューロー



広島城内に所在する護国神社前広場を国際会議ユニークベニューとして初めて利用した。広島城および護国神社のサポートを得て、虫よけ、トイレの確保、雨天対策等、万全の体制で実施することができた。歓迎レセプションでは、2023年のG7首脳会談に倣い、広島県農水局と県内23市町の生産者が連携して県産品を活用した創作メニューを提供した。衛生面に配慮し、生ものの提供はホテルに移動して行った。当日は具体的な食材の案内とメニューリストの配布を通じて、約40か国からの参加者に県産品の農産物や地酒、郷土料理等の情報を共有するとともに、地元ステークホルダーにも国際会議誘致のメリットをアピールした。SDGsの観点から、会場では持ち帰り可能なリサイクル素材のカップ類を用意した。夜には歓楽街・流川にて「はしご酒体験」も実施した。

大阪 × 大阪中之島美術館

## 美術館をユニークベニューとし 話題の展覧会を貸切で鑑賞

第7回ソフトマター国際会議  
(ISM2023)

主催：第7回ソフトマター国際会議組織委員会  
CB：公益財団法人 大阪観光局 MICE推進部



「大阪中之島美術館」の4F展覧会会場にて開催中の「民藝(MINGEI)展」を夜間貸切観覧。観覧後は1階ホールを利用して懇親会を開催した。先着150名とした展覧会の参加枠は即日完売。実際には153名が参加し、内133名(87%)が外国人であった。同展は英語による解説等がなく、展示室内でのスマホ使用も禁止されていたため、通訳ガイドを5名配置。通訳ガイドツアーを実施した。また、当日はミュージアムショップの営業時間を延長してもらい、参加者が懇親会開始までの間にゆっくりショッピングを楽しめるよう配慮。民藝展グッズの一部は、アンケート回答者へのプレゼントとしても活用し、回収率アップを図った。

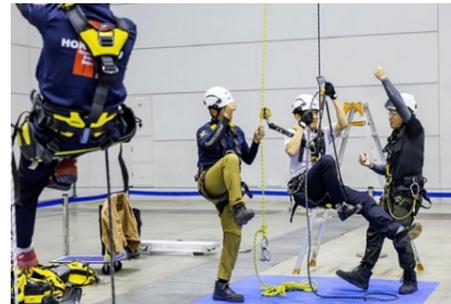
懇親会の食事は美術館内のレストランにケータリングを依頼。アルコールが飲めない参加者が多かったため、ソフトドリンクメニューを工夫してもらったところ、大変好評であった。

北九州 × 西日本総合展示場(新館)

## 一般公開エリアも設けて ネットワーキングの機会を拡大

Global Offshore Wind Summit-Japan 2023  
(GOWS-J 2023)

主催：一般社団法人 日本風力発電協会  
CB：公益財団法人  
北九州観光コンベンション協会 誘致部



西日本総合展示場(新館)にて、国内外の洋上風力発電関係企業のためのビジネス交流および洋上風力発電開発地域における合意形成を目的とした展示を設営した。チケット購入者のみ入場可能な第1会場で講演を行う一方、第2会場は無料で市民にも開放。地域交流を深めることで、洋上風力発電の開発予定地域での理解促進を図った。場内には商談を行えるオープンスペース(無料商談席)や有償の個室商談室を用意するほか、大使館や企業団体でのネットワーキングを実施。学生ワークショップ・企業展示ブースも設けることで産学交流の機会を創出し、出展企業や大使館が実施するミニセッションにも学生が自由に参加できるよう取り計らった。また今回は地元新聞社の協力を得て、現地で参加できなかった人にも国際会議を身近に感じてもらう、その記事を通して内容を知ることができるようにした。

北九州 × ミクニワールドスタジアム北九州

## スタジアムのVIPフロアで ウェルカムパーティーを開催

7th Asian Conference on Pattern Recognition

主催：ロボットセンサネットワーク委員会  
CB：公益財団法人  
北九州観光コンベンション協会



サッカースタジアム、ミクニワールドスタジアム北九州のVIPフロアにてウェルカムパーティーを開催。グラウンドの芝生を選手目線で感じられる入場導線を設定するほか、場内の大型ビジョンでの歓迎・PR動画の投影、関門海峡からの花火打ち上げなど、特別感のある演出を試みた。また、「SDGs推進に向けた世界のモデル都市」に選定されている北九州市の取り組みをアピールするため、竹の廃材を利用した創作楽器のミニコンサートを開催。竹の廃材や点字新聞のリサイクル素材を用いたお土産は、NPO法人の活動支援につながった。ビュッフェでは、小倉牛や玄界灘の魚介類など、地域の特色を生かしたメニューを提供。食材の選定・調達から料理の提供までを担当した地元百貨店との連携を深め、会議参加者の地元での消費拡大につながる取り組みについて意見交換できたことも、今回の成果のひとつといえる。

福井 × 四季の森 旧傘松閣/永平寺ほか

## 3自治体の広域連携により 新たなコンテンツを創出

グローバルウェルネスインスティテュート  
ジャパンラウンドテーブル(GWI)

主催：福井県広域ウェルネス推進協議会  
CB：公益財団法人  
福井県観光連盟 コンベンション推進事業部



2023年11月11日に、大本山永平寺の旧傘松閣を移築した「絵天井広間(E-RISE 四季の森内)」にて、国際会議の一般参加者と講演者によるラウンドテーブルを開催。スクリーンや音響機器、カーペット、椅子、机等を持ち込み、同時通訳ブースを設営することにより、寺院および関連施設での国際会議も可能であることを実証した。

会議にあわせて坂井市、あわら市、永平寺町の自治体の枠を超えた広域連携によるエクスカージョンを実施し、新たなウェルネスコンテンツを創出。永平寺での精進料理体験・座禅体験、一般には公開していない施設の特別拝観(英語が堪能な老師による案内・説明付き)のほか、永平寺町の酒蔵の複合施設での利き酒体験、永平寺町・宿坊での宿泊および朝課、あわら市温泉旅館での朝ヨガ・足湯体験、坂井市での雄鳥・三国湊散策、ミシラン掲載レストランでのランチを提供した。

大阪 × 千里ライフサイエンスセンター

## ポストコロナの時代に向け 多様な参加形態の講座を用意

第26回IUPAC化学熱力学国際会議 (ICCT-2023)

主催：第26回IUPAC化学熱力学国際会議組織委員会  
CB：公益財団法人 大阪観光局



コロナ禍による5年のインターバルを経て、30を超える国と地域から数多くの研究者が来日。地域住民、特に中高生に向けて、化学熱力学の考え方とその成果をわかり易く発信する市民公開講座を開設した。講演を聴くだけの企画にならないよう、パネルディスカッションの時間を設け、講師の先生方には参加者からの質問にできる限り答えてもらった。講座は対面で行ったが(現地参加者70名)、対面形式を望まない参加者、遠方からの参加希望者に向けてオンライン配信も実施(オンライン参加者57名)。さらにオンデマンドでの配信も実施するなど、ポストコロナの時代に向けた多様な参加形態での対応を行った。

広島 × 原爆ドーム・宮島

## 午後の時間帯を有効活用し 2つの世界遺産を訪問

第11回分裂酵母国際学会 (pombe2023)

主催：第11回分裂酵母国際会議実行委員会  
CB：公益財団法人 広島観光コンベンションビューロー



昼食から夕食までの限られた時間で、2つの世界文化遺産、原爆ドームと厳島神社を巡った。参加者の体力温存と時間節約のため、移動には平和公園と宮島を最短時間で結ぶ世界遺産航路の高速船を利用した。川と海の両方から広島景色を楽しんでもらうとともに、船内で広島の紹介動画を流し、その歴史や魅力を紹介した。宮島では、厳島神社、豊国神社(千畳閣)、宮島水族館を自由に巡れるチケットを配布した。迷わず安心して観光と買い物を楽しめるよう、随所にスタッフを配置し、案内も行った。地酒や地ビール、土産物などのPRも行うなど、広島の多彩な魅力を発信したことで、現地の飲食、観光、運輸業界など、広い範囲に経済効果をもたらした。

大分 × 宇佐神宮ほか

## 広域周遊を見込んで 複数の神社仏閣で会議を開催

UNWTO. TedQual セミナー in 大分県

主催：Ted Qualネットワーク日本別府国際会議委員会  
CB：公益財団法人 ツーリズムおおい



宇佐神宮の参集殿、泉福寺、無動寺、両子寺等の寺社仏閣をユニークベニューとして会議を開催。いずれも別府市から車で約1時間の距離にあり、広域周遊が見込めると考えた。特に八幡さまの総本宮である宇佐神宮は、格式が高く、建物にも文化的な特徴があることが海外からの参加者に好評で、それを解説できる専門家が講演を行うことも相まって、開催成功にいたった。学会最終日にはエクスカージョンとして、温泉の蒸気を利用して「みょうばん(湯の花)」を作る無形民俗文化財の製造方法を見学し、先端技術と竹工芸を組み合わせたランタン作りのワークショップを実施。その他、一般市民向けの公開基調講演・パネルディスカッションも開催した。

広島 × 宮島

## 世界遺産・宮島訪問を通じて 広島若者と交流

第19回キラル分光国際会議 (CD2023)

主催：第19回キラル分光国際会議組織委員会  
CB：公益財団法人 広島観光コンベンションビューロー



会議期間中にエクスカージョンとして世界遺産・宮島を訪問した。バス4台に国際会議参加者、学生を中心としたボランティア34人、通訳ガイド4人が乗車するよう配置し、10代・20代の広島県民・市民と国際会議参加者の交流を促した。宮島では、廿日市市発祥の「けん玉」をバンケットのアトラクションとして採用した。小学生チャンピオンによる演舞の見学に加え、参加者自身が「けん玉」に挑戦できる体験コーナーを設け、食事だけでなく多様な交流の場として機能させた。夜にはライトアップされた厳島神社の大鳥居に船で近づく「世界遺産ナイトクルージング」を実施。通常の日帰りツアーでは難しい、レアな体験を提供した。

仙台 × 国宝瑞巖寺、円通院、青葉城跡等

## 異なる視点から仙台を見る エクスカージョンを実施

Society for Magnetic Resonance Angiography  
35th Annual Meeting (SMRA 35th Annual Meeting)

主催：SMRA第35回大会  
CB：公益財団法人 仙台観光国際協会 MICE推進部



4日にわたる学会期間中、初日から3日目には、結婚式場、ビール工場、テラスタイプのレストランにてレセプションを開催。書道のパフォーマンスや和太鼓の演奏などで会場に華を添えた。最終日には、日本三景松島を一望できるビューフェレストランでのランチ、国宝瑞巖寺・円通院見学、松島散策を含めたエクスカージョンを実施した。また、参加者とその家族へのオブショナルツアーとして、市内散策(青葉城跡、伊達政宗霊廟・瑞鳳殿等)、世界遺産である中尊寺金色堂・毛越寺見学のほか、東日本大震災の遺構見学を含むプランも実行。全く違う視点から仙台を体験してもらい、今後の仙台での会議開催における新たな選択肢としてアピールした。

広島 × 広島市環境局中工場・宮島

## 個人では訪問が難しい場所も エクスカージョンの目的地に

13th International Fatigue Congress (FATIGUE2022<sup>+</sup>)

主催：第13回国際疲労学会実行委員会  
CB：公益財団法人 広島観光コンベンションビューロー



最初の訪問先として、開催地ならではの知見を得られる一方で、旅行者が個人で訪問することが少ないごみ処理施設・広島市環境局中工場を選定。現地では最新設備のみならず、地理・歴史的な背景についても通訳案内士が英語で解説した。次の訪問先である宮島では、国内外の参加者に日本の歴史や文化、その価値をアピール。厳島神社参拝や大聖院、もみじ谷など、人気の高い場所を効率的に回れるよう、移動中のバスで島内地図を配布したほか、所要所に通訳ガイドを配置して丁寧な案内を行った。参加者が現地の飲食店や土産店で商品を購入したことで地域の魅力や資源を生かすことができ、地元経済にも貢献できた。

富山 × グランドプラザ/富山市街地・岩瀬エリア

## 商店街の一角を占める 全天候型広場でバンケット開催

第26回IBA/第18回PIXE 国際会議 (IBA/PIXE 2023)

主催：「IBA/PIXE 2023 国際会議」実行委員会  
CB：公益財団法人 富山コンベンションビューロー



富山市中心部の商店街の一角にある全天候型広場「グランドプラザ」をユニークベニューとしてバンケットを実施し、現地での消費拡大に貢献。当日は200名超の参加者が会場に集まり、地元の料理(氷見牛、五箇山豆腐、ます寿司など)や地酒・地ワイン等を楽しみながら懇親を深めた。アトラクションとして富山の代表的な伝統芸能「おわら風の盆」の演舞も披露。希望者には演舞の体験もしてもらった。城や伝統的な街並み見学、「くすりの富山」を体感できる丸薬作り、和菓子作りなど、多彩な体験メニューを組み込んだエクスカージョンには、近隣大学・高等専門学校の学生も同行。国内外の研究者との交流の深める絶好の機会となった。

東京 × 東京大学安田講堂

## 一般市民・学生に向けて 本学会の科学的取り組みを紹介

the 28th IUPAP International conference  
on Statistical Physics, Statphys28 (Statphys28)

主催：第28回IUPAP統計物理学国際会議組織委員会  
CB：公益財団法人 東京観光財団 コンベンション事業部



統計物理学から生まれた科学的発見を一般にも周知し、本学会の科学的取り組みへの理解と支援を募るために公開講演会を開催。日本を代表する統計物理学の研究者、西森秀稔氏が登壇し、物理学の専門知識のない一般の方々を対象に、量子アニーリングとその量子計算機での実装やスピングラスの統計物理学と情報の関わりについて講演を行った。一般の市民や学生の科学に対する興味・関心は高く、実際に最先端の現場にいる研究者の解説を生で聞きたいという要望も多い。さらには、開催場所が東京大学安田講堂という、歴史と特色ある場所であったことも魅力となり、多くの聴講者を集めることができた。

千葉 × 幕張メッセ国際会議場等

## 千葉の夏・夏祭りをテーマに 非日常的な異文化体験を提供

52nd International Congress and Exposition  
on Noise Control Engineering (Inter-Noise 2023)

主催：第52回国際騒音制御学会組織委員会  
CB：公益財団法人 ちば国際コンベンションビューロー MICE事業部



役員向けの屋形船ディナークルーズや、会議参加者（同伴者を含む）向けの盆踊り、書道、風鈴の絵付け、呈茶、折り鶴づくりなど、「夏の涼を感じる千葉の夏・夏祭り」をコンセプトとした体験型プログラムを実施。非日常感あふれる異文化体験を通して、海外からの参加者に「千葉の夏および伝統・文化」を強く印象付け、日本での国際会議開催のアドバンテージをアピールしたほか、会場周辺地域の商業施設で利用できる各種クーポンや周辺マップを配布し、学会参加者が個人でも気軽にショッピングを楽しめるよう配慮した。また、経済効果拡大のため、地元ステーキホルダーとの広域連携を強化するなど、「オール千葉」での支援体制の強化を図った。

仙台 × 松島・蔵王・中尊寺

## 東北地方の自然環境に親しむ 3種類の日帰りツアーを実施

第17回岩石-水相互作用国際会議／  
第14回応用同位体地球化学国際会議 (WRI-17/AIG-14)

主催：WRI-17/AIG-14組織委員会  
CB：公益財団法人 仙台観光国際協会 MICE事業部



会期中に、会議参加者全員が参加可能な3種類の日帰りツアー（①松島と東日本大震災被災地見学、②蔵王火山見学、③中尊寺と狛鼻溪（蔵美溪）見学）を実施。地質見学を目的としたナチュラル・サイエンスツアーと社会・文化ツアー（エコサイエンスおよび震災復興観察ツアー）を組み合わせることで、日本文化や東北地方の里山における生活と自然環境に親しむ機会を提供した。会議終了後には、東北大学に新設された次世代放射光施設「ナノテラス」を見学するツアーを敢行し、「サイエンスシティ」としての仙台の魅力をアピール。いずれのツアーも今後パッケージ化して、各種会議やイベントでも活用することを視野に入れている。

岡山 × 岡山城

## 岡山市を一望できる 城の天守でバンケットを開催

Joint Workshop on Future of Machine Learning in Geotechnics (FOMLIG)  
& Use of Urban Geoinformation for Geotechnical Practice

主催：FOMLIG Okayama組織委員会  
CB：公益社団法人 おかやま観光コンベンション協会



2023年12月5日、6日に岡山で開催された国際ワークショップ初日の夜に、岡山城天守内でバンケットを開催。岡山の「地のもの」を使った料理を用意するなど、岡山の食文化や日本の地域ごとの食文化の違いについても触れる機会を提供した。会場内には甲冑体験ができるスペースを作り、刀や忍者の道具（手裏剣など）を貸し出して記念撮影にも協力。さらに、岡山おもてなし武将隊による正しい刀の持ち方や手裏剣の投げ方のレクチャーは好評を博した。バンケットの前には岡山城周辺や天守内を散策するための時間を設け、日本・岡山の文化に触れる機会も提供した。

福岡 × 太宰府天満宮、福岡国際センターほか

## 近隣都市の観光施設にて 日本の文化を効率よく体験

14th International Conference  
on Nitride Semiconductors (ICNS-14)

主催：ICNS14組織委員会  
CB：公益財団法人 福岡観光コンベンションビューロー



会議会場がある福岡市から近隣都市の観光施設への訪問および日本の文化体験を効率よく取り入れた、2つのエクスカージョンコースを設定した（コースA：福岡市から貸切観光バスにて太宰府天満宮へ行き、その後福岡市福岡国際センターにて大相撲九州場所を観戦。コースB：貸切バスにて糸島市の牡蠣小屋へ行き、その後久留米市の酒蔵を訪問）。特に大相撲観戦、牡蠣小屋、酒蔵訪問については、海外からの参加者にとっては個人での手配が難しいため、エクスカージョンとして設定したことを非常に喜ばれた。各コースともに予想を上回る応募があり、参加者の好みが観光・ショッピングから体験型イベントに移行していることを実感した。

京都 × 国立京都国際会館

## 無料の市民講座を開催し 市民との交流、社会啓発を図る

第11回アジア児童青年精神医学会 (ASCAPAP 2023)

主催：一般社団法人 日本児童青年精神医学会  
CB：公益財団法人 京都文化交流コンベンションビューロー



コロナ禍により、2021年から2023年5月に延期開催された本学会では、ポストコロナに向けた「音楽や芸術等、言語の差異を超えた感覚を通じた共感的空間の創出」というコンセプトの下、無料の市民公開講座を企画・開催。京都市立芸術大学の松井教授による発達障害と創造性とアートの講演と芸術展示（2点）のほか、ジャズピアニスト秩父英里氏による演奏と、こころの傷付きと芸術による癒やしに関するトークセッションを実施した。事前に駅へのチラシ設置やHP・SNS等を利用した告知を積極的に行った結果、事前申込み122名、当日参加145名の計267名の参加を得ることができ、今後に向けた国際学会誘致の気運がさらに高まった。

札幌 × 銀河の森天文台等

## 道内他都市との連携と 次世代向け体験イベントの実施

第35回国際電波科学連合総会 (URSI GASS 2023)

主催：一般社団法人電子情報通信学会、日本学術会議、国際電波科学連合 (URSI)  
CB：公益財団法人 札幌国際プラザ・コンベンションビューロー



2泊3日の日程でエクスカージョンを実施。個人ではアクセスが難しい陸別町の「SuperDARN 北海道-陸別 HF レーダー」および「りくべつ宇宙地球科学館（銀河の森天文台）」を訪問し、最先端の科学・技術を視察した。宿泊は大雪山国立公園内層雲峡の温泉旅館とし、北海道ならではの地形、自然、気候、食、温泉等を体験する機会も提供した。また、市民向け体験型イベントとして、ラジオ製作を通じて電波について親子で楽しく学んでもらう科学教室も開催。参加した札幌と陸別の小学生がオンラインで交流する企画や、札幌市青少年科学館の協力によるサイエンスショーもあり、電波科学の世界を身近に体験するユニークなプログラムとなった。

福岡 × 朝倉地方の豪雨災害復旧・復興現場

## 都市の持続的な発展を考える テクニカルツアーを敢行

第2回環境に配慮した持続可能な建設技術に関する  
国際会議 (CREST2023)

主催：CREST 2023大会実行委員会 (九州大学)  
CB：公益財団法人 福岡観光コンベンションビューロー



環境に配慮した持続可能な建設技術に関する国際会議参加者にふさわしいエクスカージョンとして、テクニカルツアーを企画・催行。福岡県・国土交通省九州地方整備局の後援により、豪雨災害の復旧・復興現場2箇所を見学した。また福岡市内では、新しい技術や画期的なアイデアによってさまざまな課題を解決し、未来に誇れるモデル都市として持続的に発展していくための方策を実施する「FUKUOKA Smart EAST」を展開中の九州大学箱崎キャンパス跡地の見学と、博多駅前陥没事故現場の視察を行った。さらに、豪雨による被害を免れた国指定文化財を本堂とする南禅寺や日本最古の実働水車である三連水車も見学し、日本の文化に触れてもらう機会も作った。

名古屋 × リニア・鉄道館

## 参加者の知的好奇心に訴える 展示施設を会場に選定

第7回アジア太平洋プラズマ物理国際会議  
(7th Asia-Pacific Conference on Plasma Physics)

主催：アジア太平洋物理学会連合プラズマ物理分科会  
CB：公益財団法人 名古屋観光コンベンションビューロー



学会開催期間中の夜に、東海道新幹線やリニア中央新幹線などの展示を通じて、日本の「高速鉄道技術の進歩」を紹介する「リニア・鉄道館」にて、立食のバンケットを開催した。当館の展示は理工学系の学会である当該学会参加者の知的好奇心を強く刺激。同時に、ものづくり名古屋の印象を深めることができた。会場では、地元の日本酒の鏡開きや獅子舞、施設の大きさを生かした和太鼓の演奏など、日本文化を感じるアトラクションも提供。ビーガンに対応したメニューも取り入れ、多様性にも対応した。学会の本会場では、海外からの参加者に向けて英語対応の観光案内デスクを設置することで、近隣への観光を促すことができた。

横浜 × 曹洞宗大本山總持寺

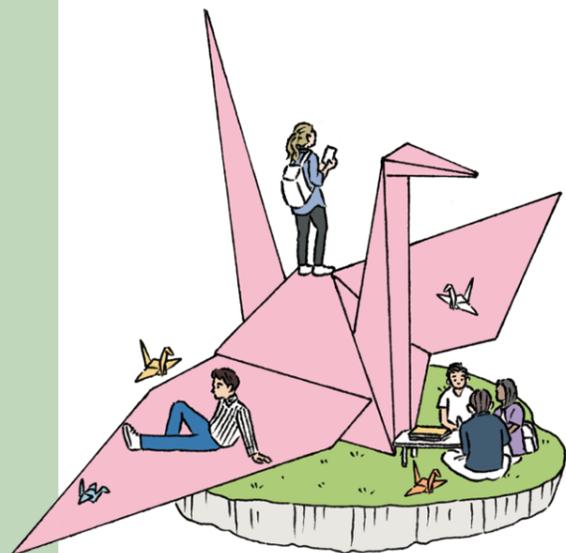
## 通常は信徒研修等に用いられる 禅寺をレセプションに利用

横浜国際舞台芸術ミーティング2023  
「YPAMエクステンション」

主催：横浜国際舞台芸術ミーティング実行委員会  
CB：公益財団法人 横浜観光コンベンション・ビューロー



通常は一般開放（貸館）していない鶴見区の禅寺総本山・曹洞宗 大本山總持寺をレセプション会場として利用し、ユニークベニューとしての開拓と実績作りを行った。当日は横浜産の食材のみを使用した食事、總持寺の行事で特別に作った日本酒、自然派ワインなどを提供。レセプションの開始前には座禅体験や境内見学ツアーなどの体験型プログラムも実施した。加えて、地域住民を含むステークホルダー向けの公開シンポジウムを2本実施。横浜の国際性のアピールや国際会議への興味・関心向上、今後の観光・国際会議誘致に資するレガシーの創出および支持基盤となる主体的地元ステークホルダーとの関係強化のモデルケースとなることを目指した。





観光庁  
Japan Tourism Agency

